



全国まちづくり会議 in 東京ちよだ オープニングセッション

『まちづくりの哲学』

2023.10.7 13:15~15:00 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー1083

宮台 真司 社会学者／東京都立大学教授
蓑原 敬 都市プランナー／蓑原計画事務所所長
野口 浩平 代官山ステキな街づくり協議会

主催：認定 NPO 法人日本都市計画家協会



JSURP 全国まちづくり会議、宮台真司氏との対談のためのメモ

蓑原 敬

2023年10月7日

この対談の仕掛けの中核にいらっしゃると思われる高鍋さんは、以下のような問題がこの対談で話し合われることを期待しているようです。

1. 社会が急速に変容してきた中で、今リアルなまちづくりが重要な理由は何か。
2. ローカルな地域主体のまちづくりと、俯瞰的に考える都市計画との連動はいかにあるべきか。
3. そのような中で我々プランナーやまちづくりを先導していこうとする者（行政も含めて）の役割は何か。

今、まちづくり、都市計画、アーバニズム（これが最も幅広い概念なので以下、この言葉に、まちづくり、都市計画を代表させることにします）の土台が揺らいでいて、僕たちのアーバニズムの根底に今まであった「社会が急速に変容して」いるのだという認識は、僕も共有しています。

その上で、以上のような問題にどう答えるのか、皆さんにだけでなく僕自身にも突きつけられている課題だと考えているので、まずは、この課題から一緒に考え出したいと思います。

リアルなまちづくりとは何を意味するのでしょうか。

まず、現実には、リアルに起こっている現象としてのアーバニズムの現場があり、この現場のリアルな現象を科学的に理解することがリアルなまちづくりになるはずなんです。

その現場の基盤には、自然地理的条件、人文地理的条件である風土があり、地域に住んでいる人がいます。その風土のほとんどの部分は、すでにヒトの手が入っていて、その介入の最も先端的な部分がまちであり都市であり広域圏（リージョン）、国土として存在し、動いています。この風土に介入し、部分的に管理し、変化させているのはヒトですが、誰が、何がアクターとして具体的にどう介入しているのか、その介入にヒトとヒト、ヒトとモノがどう繋がり、どういう関係性を持って繋がっているのか。ヒト個人までもグローバルな関係性に巻き込まれている現代の地球社会では、そこから考え直さなければいけなくなっているようです。それは、以下のような問題が発生しているからです。

現象としてのアーバニズムの目下の最大の問題は、いわゆる人新世問題です。地球環境の激変、気象、気候変化、大気、土壌、海洋汚染、海面上昇、人口増と土壌汚染による食糧危機、水危機、生物多様性の減少などなど、アーバニズムの土台である風土が激変しつつあり、これに僕らはどう対応したらいいのか。

この危機は、すでに国連の IPCC などでも指摘され、SDGs という対処方針も示されています。その現象を招いている主なアクターである資本主義的企業の立役者であるビル・ゲイツやクラウド・シュワブなどですら警鐘を鳴らしていますが、まだ僕らには程遠い世界に止まっている。

現象している世界のもう一つの大きな変化は、工業を基盤とする近代社会が、技術革新によって、脱工業化し、情報化社会と呼ばれる社会に移行している問題です。AI, IOT などによって、リアルでない、ヴァーチャルな世界が現象世界と見紛う迫真性を持って実現しつつあるし、そのヴァーチャルな世界に、すでにヒト個人がスマ

ホで直結している。またロボットも急速に進歩してきているので、ヒトの仕事も大きく変わり、風土、風景も急速に変わる可能性が高い。

この二つの問題を大きな契機として、近代という時代が終わり、新しい時代が来ていることは確かなようです。(近代の機械技術による工業時代の次は、電磁気技術による新しい社会経済文化の時代だと考え、僕は心業時代と名付けました。)

この問題について、深く立ち入ることは、この場に課せられた課題の範囲を大きく超えてしまうので、ここで立ち入ることはできませんが、現象としてのリアルな世界での最大の問題であることだけは指摘しておきたいと思います。アーバニズムの世界でも、この問題意識に沿って、すでに議論が始まっています。

しかし、第一の課題としてあげられている「リアルなまちづくり」の「リアル」は、現象としてのリアルに言及しているのではないのではないかと思います。今現象している「まち」が、「まち」らしくない、嘘っぽい、僕らが心の中でイメージしている「まち」とは何か違う、だから今現象しているまちづくりの方向を変えたいという期待を反映した表現ではないかと思います。違和感がある、疎外感を持つ「まち」が蔓延り、しかもそれが時代をリードしていて僕らの身近にまで浸透してきているのが何故か虚しく感じられるので、こういう表現が生まれているのではないのでしょうか。

僕自身の経験から裏付けます。僕は東京の当時（1930年代）のスプロール前線だった目黒、祐天寺裏で生まれ、小学校5年まで過ごしました。東横線祐天寺駅前の通りと油面通りが「まち」で、桶屋、自転車屋の子などまちの友達もたくさんいました。街路に沿って多様な家で構成されている街並みがあり、縁日になると露店が並んで賑わい、ちょっとそれた横道では仲間遊びができました。たまの休日には母親に連れられて渋谷、浅草、銀座に行き、身近な街並みとは違う、きらびやかな世界の最先端に触れていました。疎開で福岡に行き、唐人町、西新町などが身近な「まち」、天神町や中洲がハレの「まち」で、そこが僕の人生の学校でもあったのです。だから、「まち」は懐かしい。

しかし、「まち」の至る所、車も対向しにくいほど街路が狭く、木造家屋が密集していたので、空襲にはひとたまりもなく「まち」は焼け野原になりました。だから、戦後の都市計画の最大の課題は、広い道路網作りと防火、耐火建築物の普及でした。それを道路事業、区画整理事業、建築基準法、様々な再開発法制などが支えてきた。遅れて近代化が始まった日本の先達だったのはヨーロッパの都市で、僕らはそれに学んできた。だから僕らの心の中にあるアーバニズムのイメージにある「まち」は沿道性の街並みの中で多様な自律的な活動が行われ、それが少しずつ、追増的に変わっていくものだった。その街並みの中では、ヒトとヒトが対面的に、親密だが、節度がある行動で長い時間の付き合いをしていた。

自動車の普及に伴い、沿道の店がなくなり、ショッピング・センターが大規模化してモール化しコンビニが出来始めると「まち」という空間、ヒトの活動も変わり、今まで享受していた「まち」ではない、「まち」もどきが出てくる。最初のうちは小さなスーパーでしたが、そのうちに巨大モールにまで発展するそれによって、自動車利用の普及を踏まえて、全国、つづうらうらアーバンもどきの世界が広がり、普及したのも事実です。すでに都市社会と農村社会は区別できなくなっています。住宅も街並み、集落の一部ではなく、買い替え、住み替えができる商品に変わっています。

僕は、1960年代以降、欧米でも再開発で「まち」を根こそぎ変えるのではな

く、「まち」を守り、再生させることも考える包括的なアーバンイズムに転換したのを見てきました。修復と保全も都市計画の重要テーマになったし、時代の刻印を引き継ぎながら「まち」の空間的文脈を考えて設計するようになった。

そこで、日本の商店街の維持、再生を願い、Fake(まがい物)のまちではない「まち」が欲しい、そのためには家業型の商業や職人で成り立つ街並みを維持、再生するために家業に代わる個業の存在が不可欠だと考えた。2000年には富山を舞台に、河合良樹、今枝忠彦さんと一緒に、「街は要る」という本にしました。田園と境目なく展開している日本の、自然豊かで美しい広域都市圏では「まち」と田園を分離するのではなく、これを一体として考え、拠点・ネットワークのアーバンな世界を創る。その拠点が伝統的に存在していた「まち」の近代化版になれば良いという願いが込められていました。

今や、Fake(まがい)どころではなく、ヴァーチャルな情報操作が「まち」の代わりをしています。「まち」の吸引力に引き寄せられ、その中にある書店に立ち寄って本を見つけて買うのではなく、過去の購買歴から、こちらの関心を熟知しているアマゾンが送ってくる情報に従って、本を選び、買う時代になっている。明らかに情報化の時代になっている。しかし、「まち」を支えるべきたくさん個業を担ってくれる中小企業が現れてきていて、「まち」が再生されつつあるとはとても言えない状況です。経済効率主義だけが尊重されているので中小企業が生活を豊かにしている「まち」を支えているという意識すらない。ヨーロッパのように交通手段を含めて、「まち」の崩壊を食い止めるよう力を尽くしているとはとても思えない。

このような僕の状況認識は共有できるのでしょうか。できるとしたら、まちづくりのアクターとしての僕らは、それにどう対応したら良いのか、それが問われていると思うのだけど、皆さんはどう考えますか。

しかし、別の階梯の問題があります。

僕が僕自身の体験として語っている以上のような認識は、僕が「まち」をどう認知してきたのかに掛かっているわけですが、僕の認知は、僕自身の体験というより、僕の学習によって刷り込まれているイメージに依っているのではないかという動物行動学、生態心理学などの知見があります。昭和の風景と言われる「三丁目の夕日」を経験したことがない世代が、そのような情景を懐かしいと思うのは、何故なのだろうか。ヒトの中には、刷込み以前のヒト自身があつて、それが新しく直接体験をしている情景を懐かしいと思っているのかも知れない。だとするとそれはヒトの世代を超えて伝えられているヒトのリアルな反応で、その反応を引き出す情景の再現をデザインすれば、まがい物ではないリアル環世界を再現することができるということにならないのか。しかし、そのように懐かしいと感じるのは後天的に与えられた刷込みだから、別の刷込みをすれば良い。それがヒトの感性、欲求に訴えかけるものであれば、その新しい刷込みがリアルに感じられるようになると考えるのか。僕には、結論がわからない。

だから、生物進化の過程をなぞって、デザインの方針として、過去の複製、その部分的、追増的修正を旨とするか、むしろ変異を求めて創造的なデザインを追求するのか、決めざるをえない。与えられたプロジェクトの場に応じて、できるだけ多くの情報を集めて場の状況、その歴史的経緯はどうだったかを学習し、様々な案を試行錯誤的に積み重ねた上で自ら決断して提案するより他ないのではないか、というのが今の僕の仮説です。もちろん、その決断が独りよがりにならないようにプロジェクトの、その場の関係者との緻密な議論の積み重ねと総意の醸成が不可欠ですが。

でも、僕は、その仮説は僕の生涯の時代経験を反映していて、進化の動的な過程の一部として現象しているに過ぎないと思っています。皆さんの生涯の時代経験から見ると、違った仮説になるかもしれないけど、皆さんはどう考えているのでしょうか。

ローカルな地域主体のまちづくりは、日本ではどうなっているのでしょうか。イタリアの「まち」に代表されるヨーロッパのまちは明らかに自治都市で、地域主体と言えそうなアーバニズムの結晶です。ヴェニス人は自分をイタリア人であるよりはヴェニス人だと思っている。「まち」の人間関係を維持し、まがい物でない「まち」の空間の文脈を維持継承しようとし続けています。特に最近では、オランダや北欧の都市のアーバニズムが熟成しつつあるように見えます。長い長い歴史の継承を経て、今に至るまで、地域に主体性がある。さらに地域の中を分けて、より小さい単位でのアーバニズムにも深い配慮がされつつあるように見えます。その中核には成熟した判断力を持つ、歴史の中で自治を守ってきた市民がいるのではないかと思います。

日本でも、倉敷、高山に始まり伝統的な街並みが残っているところでは、地域主体のまちづくりが行われてきたし、小布施や三春のように、それを計画的に作り上げることに成功している事例もあります。しかし、これらの「まち」も自らのまちづくり制度を自ら作り上げてきたわけではない。日本では「ローカル」は国に従属している部分でしかなかったからです。

しかし、地方分権一括法でその基本構造が変わりました。そのはずなのに、アーバニズムの世界は、相変わらず中央集権で、かつ、細川元熊本県知事が昔言ったように中央分権の縦割り組織群が地方自治体の末端部分まで絡めとったままです。縦割りの弊害をなくして特区のような穴抜き制度によって、地区的には例外的に一体的処理ができるような制度ができました。ところが自治体として、地域を支える住民や事業者、市民がまとまって自治的に動く伝統がない上に、地方行政自体が縦割りで、総合的、主体的に取り組もうとしても制度の上での隘路が多すぎて、それができない。だから特区的な制度も縦割りの行政や資本の都合が良いように運用されていて、地域主体のまちづくりとは程遠いというのが実態ではないでしょうか。基礎自治体である市町村の統合が中途半端に終わっていて、基礎自治体としての統治能力、自治能力が十分でない市町村が多いので、今は、中二階になって実質的機能が著しく下がっている都道府県と一体となって、地域主体のアーバニズムに取り組む必要があるでしょう。逆にすでに十分な自治行政能力を備えている東京や横浜などの巨大自治体は、住民との距離が遠すぎるので、区への分権を行わないと地域主体のアーバニズムは実現できないでしょう。

すでに福祉行政の領域では、ゆりかごから墓場まで国が面倒をみるできないという実態に合わせて、地域包括ケアという標語のもとに、地域社会の再生に向けた努力が始まっています。

他の行政領域でも、すべて地域包括整備という考え方でアーバニズムを含む行政を地域主体に整理し直すことが不可避になっているのではないのでしょうか。すでに道路問題、公共施設問題、空き家問題などを巡って身近な規模、単位での見直し整理が始まっていると思います。住民による本当の自治が求められ、少しずつ広がりつつあるのではないかと期待したい。

俯瞰的に考えることこそ、アーバニズムの本質です。1940年代以前には、西

欧でも行政セクターごとの計画はありましたが、政治や行政が総合的、俯瞰的に考えることはできなかつた。しかし、総力戦を戦った第二次世界大戦の経験を経て、銃後の経済計画を含め、総合的、俯瞰的に戦わなければ戦争に負けることに気づいた。それも最新の技術革新の産物を援用しなければならない。AI・IOT 社会に繋がるOR が誕生し、戦局に大きな影響を与えました。だから、共産主義社会だけではなく、資本主義社会でもケインズ経済学を援用し、民主主義的政治下でも計画的に物事を処理することが当然のこととして受け入れられてきた。資本主義下で発生する景気循環をできるだけ鎮め、経済恐慌を乗り越えるためにも、不可避の選択だったので。1929年の大恐慌を乗り越える一つのシンボルプロジェクトが TVA テネシー川流域総合開発事業でした。僕のアーバニズムの学習はそこから始まっています。僕は1960年代初頭のアメリカで、その残映ともいべき W. アイサードの Regional Science とそれを援用している Penn・Jersey 交通計画を学びました。

俯瞰的に考えて行動するためには、特定の技術部門に縛られてはできない。

関連する各技術部門の人たちと協働して、部門別の努力が全体としての都市や広域圏の福利をいかに高められるのかを考える俯瞰的職能が必要です。個々の戦闘を戦う戦術ではなくて、戦争そのものを勝利に導く戦略が欠かせないのです。そのような包括的、俯瞰的技術には必然的に人の生活全体にかかわる幅広い文化的視野が必要になる。何が本当の福利なのか問い直されるが、最終的には空間のデザイン感覚も欠かせない。

実は、Architecture 建築という行為も、昔はそういう、俯瞰的行為だと考えられていました。だから、僕が勝手に師事した大高正人という建築家のモットーは PAU でした。建築を生み出す生産システムとアーバニズムを考えた上で、技術を束ねる術として建築があるという俯瞰的な標語でした。彼の思想は、自ら生たった三春のまちに結実しています。

日本のアーバニズムは、アーバニズム自体を考える立場の人がいない場なのです。そのことに気づいた元首相だった田中角栄は国土庁の下河辺淳の勧めに従って国土利用計画法を作りました。そこには、都市地域だけではなく、農業地域、森林地域、自然公園地域、自然保全地域などの広域圏を俯瞰して計画する制度があります。さらにそのような土地利用の根底にある土地取引自体の取引管理についての制度も含まれています。しかし、縦割り、中央分権の日本社会の中では、この法律が働く余地はなく今は全くの休眠状態です。

しかし、地方分権一括法の趣旨を実態化するよう、県や基礎自治体が動けば、この法律の趣旨が地方レベルで実現する可能性が生まれると思います。

今年やめた奈良県の荒井前知事にはそういう志があったようにお見受けしました。地方自治を実体化する強力な地方自治体が生まれることを期待したいと思います。実際、最も先進的で俯瞰的なアーバニズムを日本でも実践していたのは、かつての革新自治体、横浜市、神戸市、旭川市などでした。

しかし、ここでも別の階梯の問題があります。

近代化、人口膨張、経済成長が進む時期においては、ヒトのハビタットも急速な変貌を遂げる。ヒトが今まで住んでいたハビタットとは異なった環世界を人工的に短期間に作り出すことになる。当然、その行為を包む自然環境、風土は急激に変わります。その時、安全、利便、快適を求めて、大規模な開発、再開発を急速に成し遂げることが避けられなかつた。ジェーン・ジェイコブスがいかに非難しても、ある時期には、俯瞰的な都市計画は必要だし、NY にとってロバート・モーゼスは欠かせ

ない存在だった。日本でも、国土庁の下河辺淳や横浜市の田村明のように、総合的、俯瞰的に考えてアーバニズムを進める人が存在した時代がありました。僕は、そのような急速な経済発展の過程の中で仕事をしてきたから、俯瞰的に考えて、仕事すること自体を全面的に否定する言説には同意できない。今の日本の都市の在り方に違和感があっても、当時の事情の理解が欠かせません。それは近代化に遅れた後発国でのアーバニズムを考える時にも突きつけられる問題です。

近代化、人口膨張、経済成長の時代には、俯瞰的に考え（先進国があり予測がしやすかった）時間を止めて、近代化の変化の被害を受ける人を説得した上で、できるだけ大規模なプロジェクトにして、設計し、施工してモノを作り出すという静態的な仕組みが欠かせなかった。マスタープランを作り、それを効率的に実現することが欠かせなかった。近代主義的な開発です。

その尖兵的な役割を果たしたのが BAUHAUS であり、グロピウス、CIAM をリードしたコルビュジエでした。それは大資本の論理、社会主義的な論理に適応しているので、一時は世界を席卷した。僕らも、一時は、その近代主義的な論理の熱心な信者であり、推進者だった。近代化が遅れた、歴史的経緯から市民社会ではない社会構造を持つ社会、ドバイやアブダビなどのアラブ社会や、ロシア、中国などの都市では、それが今でも普遍化している。

しかし、ヨーロッパやアメリカの一部では、それが歴史がある市民社会には馴染まないとわかって 1970 年代には方向転換している。アーバニズムは、開発、再開発だけでなく、修復、保全も含めた包括的なものになっています。日本はまだ、それが変わっていません。

1980 年代以降、新自由主義が台頭した西欧社会で、国家や大資本が主導するアーバニズムのプロジェクトでは、部分的ではあっても、俯瞰的に仕事を進めようとしている。今の日本でも、俯瞰の目的と対象が換骨奪胎されていますが、大丸有、日本橋、六本木などがその良い例です。

しかし、人口増、高度成長のアーバニズムと人口減、成熟経済のアーバニズムが同じはずがない。では、成長や開発とは逆のベクトルが働いている今の時代には、どう俯瞰的に考えるのか。どういう俯瞰によって行動方針を引き出すのか、答えが出せていない。（「開発」の逆ベクトルを指示する言葉すらありません。だから僕は間引いて戻すという意味で、「間戻」という言葉を作り、それを公共目的にするべきだと思っています。）

この隘路に直面して、問題と対決することを避ける姿勢も生まれます。事態を観照して美学的に批評することもできます。現状を嘆いて、それを巧みに文学的に表現する人も多い。しかし、僕らのようにヒトとモノに関わって、それを動かそうとする商売の人間には頼りにならない。

しかし、今、新しい技術革新を経て、近代化を支えた工業化の時代が終わり次の時代に入ろうとしている。人口減少と経済成熟、経済転換が不可避なポスト近代の時代に入っている。そこでは大量生産、大量消費、大量廃棄という直線的な社会経済システムは少量生産、モノ・環境賞味、廃棄の極小化に向けて循環型の社会経済システムに転換せざるをえなくなっている。新たなフローの極大化を求める進化の方向性は、今あるストックの最適利用による、フローの減少への進化の方向性に転換せざるをえない。ヒトによる工作が地球の生物環境を破壊し、環境許容容量を超えていることに気づいたからです。そこにさらに、人口の縮小と高齢化が伴っている。

その時代には、設計、施工という概念で処理できる領域は少なくなり、地区の規

模でのプロジェクト関係者の連帯が不可避になる。連帯ができれば協議による地区の手直し方針を決めて、個々のプロジェクトを実現する。動き出しても不断の見直し、協働作業による実施が避けられない。そういう理念や方法によるアーバニズムが必要になってきています。

都市とか広域圏の単位になると、工業用地などを含めた空家、空き地、農地、山林なども一体的に考えるアーバニズムが不可欠になる。そして、連帯性を持った地区レベルでのアーバニズムと都市あるいは広域圏でのアーバニズムを繋ぐ補完性の考え方も必要になる。その辺の制度をどう組直すべきかという提案を、2009年に「地域主権で始まる本当の都市計画・まちづくり」という本にして提案しましたが、誰からも顧みられなかった。

今、日本の地方、例えば長野県などでは、そのような新しい過程が芽生え始めているのではないかと期待しているのですが。

以上が、60年に及ぶ僕のアーバニストとしての経験から見た現状と展望です。しかし、今日のイベントの大部分の参加者には理解しがたいことかもしれません。僕は25年に及ぶ中央と地方での行政経験があり、法律の制定や改正にも直接携わった経験もあるので、法律や制度を所与のものとは考えず、実態に合わせて変えるべきものだと思っています。またアーバニズムに関わる国際組織にも関与して海外事例、特に先進国のアーバニズムについても広く勉強してきていて、自治的な市民社会での、新しい時代にも適応した、成熟したアーバニズムの成功例も見つけてきている。日本ではなぜそれができないのか、口惜しい思いを抱き続けてきています。

だから、今の日本の法律や制度が都市計画の原点であり、アーバニズムの出発点だなどとは、全く思いません。そう書いてあることが多い最近の教科書には呆れています。

アーバニズムだけではなく、僕らの生活の土台を揺がせている人新世問題、ポスト近代問題にどう対応するのか、さらに、西欧社会とは歴史的な経路が違う日本やロシア、中国、インドなどの近代化の後発諸国がこれからどう進化していくのか。西欧社会でも近代化の反動によって、反知性主義の波が高まっていて、新自由主義、独裁主義復帰という形でトランプ現象、Brexit 現象、プーチン、習近平現象などが起こっており、短期的にはさらに問題が深刻化してきています。

このように、短期、長期の課題が奔流のように押し寄せている時、僕らは一体どう振る舞ったら良いのでしょうか。

高鍋さんが提起している第三の課題を考える時、90年に及ぶ生涯を振り返り僕に言えることは、短期的な波動では読みきれないことが多すぎるので、世の中は常に変わるということを前提に、しかし、長期的な趨勢、俯瞰的な姿勢を忘れないで未来を見据えることが欠かせないということです。

日本は人口増、成長ではない時代に入っていて、この趨勢は長期的に変わらない。しかし、長期的、地球的に見れば、今の日本は次の時代の先進国に再びなりつつあるのかもしれない。そう言い出している人もいます。

しかし、今のアーバニズムの実践の現場では、ほとんどの場合、新自由主義的な、非民主主義的な潮流が主流になってきている。でも、日本でも地方圏では新しい時代の潮流が伏流し始めている気がして、それに期待をかけたい。西欧的な市民ではないが、賢い大人として振る舞う人が増えてきているのではないかと。僕らがその仲

間に加われれば嬉しい。東京をはじめ大都市圏では、大資本とそれに寄り添っている部分近代主義的な流れが卓越している。その流れの中で、どうすれば俯瞰的に見てヒト本位、生活本位のアーバニズムを忍び込ませることができるのか、手探りで現場合わせて、賢く試みしてみるより他ないと思っています。

1980年代、Japan as No 1と言われていた時代のNY ウォール街は暗く、陰惨な感じでした。その時、僕はある超高層事務所の床の一部を住宅に転用するプロジェクトを視察したことがあります。

皆さんが関わるアーバニズムでできる資産も、用途変更を遂げながら、これから長く使い続けられる方向に向かうのか、それとも日本の伝統である「勿体無い」の精神に立ち返って、廃棄物を出きただけださないように短期・中期的に更新、循環していくのか。その場の状況、クライアントの意志、行政などの関連するアクターの弾力的な姿勢などによって結果は大きく変わるでしょう。その過程の一つの大事な結び役が僕らの仕事だと思っています。

難しい時代の難しい役割だと思いますが、僕は、時代がそれを望んでいると思います。

みなさんが、智慧を磨き、足腰を鍛えて、この難しい時代を賢く生き抜くことを願って止みません。



オープニングセッション
『まちづくりの哲学』

高鍋：それでは早速オープニングセッション「まちづくり哲学」開始いたします。私は日本都市計画家協会の理事・副会長の高鍋と申します。よろしく願いいたします。まず登壇のお3方をご紹介します。

まず都市プランナーで 蓑原計画事務所所長の蓑原敬さんです。よろしく願いいたします。

次に社会学者で東京都立大学教授の宮台真司先生です。よろしく願いいたします。

そこから今日コーディネートしていただく代官山ステキな街づくり協議会、通称代スキ会と呼ばれておりますけども、野口浩平さんです。よろしく願いいたします。

皆さん本日はどうもありがとうございます。開会に先立って私の方から この3人をお招きしたきっかけを少しお話しいたします。2011年に代スキ会が主催をして『まちづくりの哲学』という連続セッションを開催したんですね。そのときに生命学、哲学、経済学、社会学、都市計画という専門家をお呼びしてセッションをやられたわけですが、その締めくくりで蓑原さんと宮台先生が対談をされました。その後2人は2016年に対談を書籍化した『まちづくりの哲学—都市計画が語らなかつた「場所」と「世界」』を出されます。さらに最近2021年にも同じ『まちづくりの哲学 その後』という形で 同じ代官山で対談をされています。

私はこの対談を2回拝聴したんですけども、我々プランニングをやる者が都市計画を考える前提としての地域とか社会というのが相当危ないことになっている、宮台先生の言葉を借りれば民主主義が機能していないという話がある中で、じゃあこれから我々はどういう前提でプランニングを考えていったらいいのかということはじっくり考える必要があるし、そこに知見をいただけるのではないかとということでお招きした次第です。

今日の進行については野口さんをお願いしたいと思います。それでは野口さんどうぞよろしく願いいたします。

野口浩平：はい よろしく願いいたします。私が全まちに初めて参加させていただいたのは2008年でした。それから15年経って、こうしてオープニングセッションに登壇させていただいているということ、大変感慨深く思いますし光栄に存じます。高鍋さんをはじめとした、今回お招きいただいた皆さまには深く感謝を申し上げます。

宮台さんと蓑原さんのセッションは、今回で3回目となります。本を出すための対談を含めると4回目です。それが公的な場所で行われたセッションの回数ですが、それ以外のプライベートでお目にかかっていた機会まで含めると、私はこれまで、10回以上お二人の話を聞く機会に恵まれたこととなります。

10回聞く機会があっても、お二人の深い議論を私が理解するには至っていませんが、その中で私が感じたことがあったとすれば、それは「都市とは、社会の側からは見通せない価値を体験できる場所」であったように思います。それが一体どういうことなのか？については、私の力で表現できるものではありません。今日のセッションで、先生方から直接感じ取っていただけると嬉しく思います。

実は今、私は先生方の席を隣同士にしてしまったことを後悔しています。なぜなら、先ほど控え室でお二人の議論がいきなり始まって、とても割り込めそうにないことがわかったからです。そうすると、私はもういないのも同然という状態になってしまいそうです。今回の私の役割は、お二人の暴走を止めることなのだとは自覚しているので、少なくともその役割だけは全力で果たすつもりです。

さて、皆さんのお手元には、蓑原さんが書かれた参考資料があると思います。これは、議論が迷走しても戻ってこられるように、蓑原さんに作成いただいたものです。「議論の参考になるような、ペーパーを作ってください」と蓑原さんをお願いしたところ、A4で11枚分の資料が届けられました。参考資料というには、分量も多く内容も非常に濃いのですが、もう全部配ってしまえ！ということで、全文を皆さんに配布することにしました。これを熟読いただく時間

はありませんが、できるだけこの内容に沿って話を進めていきたいと思っています。もちろん、あつという間に話が脱線すると思いますし、帰ってこれなくなる可能性も高いとは思いますが、そこは司会の力不足ゆえとご容赦いただければ幸いです。

それでは早速始めたいと思います。蓑原さん、今回作っていただいた参考資料は、分量こそ11ページに及んでいますが、私にはその内容が、都市計画やまちづくりに関して深く語るための目次のように感じられました。そんな位置づけでよろしいでしょうか？

蓑原敬：蓑原です。ここに引っ張り出されてしゃべるような年齢ではないんですが、野口さんが2011年に引っ張り出してくれて宮台さんというすごい強烈な刺激剤を与えられて、いまだにその刺激が生きているような感じです。で、今の野口さんの説明ですけども、本当はこういうペーパーなんかなしにそのまましゃべる方が、生の言葉が伝わるんじゃないかと思っているんですが、残念ながらもういい歳で、いつプツンとくるかわかんないような状態だから、一応しゃべりたいと思っていることをペーパーにしました。

お断りしておかなきゃならないのは、ここに書いてあること自体が、もうすでに、野口さんが言うように暴走を止めるに値するような内容かもしれません。このペーパーっていうのは、皆さん方現場で今働いている人たち、仕事をしている人たち、特に先ほど、会長さんからの話があったように、民間に足場を置きながら、仕事をしている人たちに対してどういうメッセージを出すかということからいうと、ずいぶんかけ離れた議論をしているわけです。

宮台さんの刺激を受けて、その後、そういうかけ離れた議論をする仲間があります。その中枢メンバーの軸にいる人が野口さんや田中裕人さんであるし、銀座の竹澤さん、筑波大学の有田さんとか、東北大学の窪田さんなど何人かの人とそういう議論をずっとやってきた。そういう議論をやっていると、どうしたって、宮台さんの刺激によって、哲学的な翔んじった議論になっちゃって、皆さん方の現場とはかけ離れちゃう。

で、どうしたらもうちょっと現場とつながるような形の話にならないかということを考えてたら、野口さんの方から、この協会の高鍋さんはこういう問題意識を持って、この会を開いているということを教えてもらったので、協会の高鍋さんが持つておられる問題意識を足場にしながら、そこから議論すれば、どっかに翔んでっちゃう、暴走にならなくて済むような話になるんじゃないかと思いました。

だから、ここで語られているのは氷山の一角でして、その下にあるのはかなり、宮台さんに近いようなレベルで、我々専門家としても議論してきたということをまずお話ししておきたいと思います。

野口：ありがとうございます。宮台先生にも、一昨日ぐらいにこのペーパーをお送りしたので、ご覧いただいていると思います。私は、これまで何度もお二人の議論を伺ってきて、先生方が共通の問題意識をお持ちだということを確認しています。都市やまちづくりについて、これまでの議論からでも良いですし、このペーパーを読んだ感想でも構わないので、今日蓑原さんと話してみたいことについて、何か一言いただけませんか？

宮台真司：蓑原先生のペーパーは、今日語ろうとしていることを、引き金として触発します。いわく、元々ひらがなの「まちづくり」は、僕らを幸せにするはずのものだったのに、今の都市計画は——ここで僕は渋谷を今思い浮かべますが——人々を幸せにするものから程遠いものになったのだと。

もちろん人々は渋谷が幸せな「まち」から遠く隔たったことを直感しているので、渋谷駅の乗降客って著しく減ってしまった状況にあります。蓑原先生いわく、人々を幸せにする「まち」とは何なのかを、都市計画という枠の中で考えても、どうにもならないのだと。では、オルタ

ナティブな思考は何か。

僕の考えでは「まちづくり」に必要なのは人類学、宗教学、生態心理学、認知考古学です。人類の古くからの生活形式の研究(人類学)と、超越や全体についての構えの研究(宗教学)と、物理的環境からコールされてどうレスポンスするように習得的・生得的に方向付けられているか(生態心理学と認知考古学)の研究です。第一に、トータルなキーワードを安全・便利・快適から、幸福へとシフトし、第二に、それをベースに、僕らが「まち」によって幸せになるときに何が起きているのか言挙げし、第三に、僕らを幸せにする条件を「まち」に実装する際、どんな政治的プロセスを踏むべきなのかを明らかにすることです。

過去四十年間、日本人の幸福度は世界 50 位前後から 90 位前後までの間を低迷しています。家庭や地域や職場や都市にテックが実装されて安全・便利・快適になっても、幸せになれません。幸せはざっくりした言葉ですが、社会と人の劣化を炙り出す唯一の言葉で、僕らを不幸なまま留め置く生態学的連関に僕らを差し向けます。

僕は四半世紀前から、民主政の制度があっても、一定の前提がないと民主政として機能しないと話してきました。社会学者デュルケムが経済学と社会学の関係について「経済取引を支える契約の、契約以前の前提を考察するのが社会学だ」と述べたのがヒントになります。契約以前のとは、契約によって調達できないことです。

民主政も民主政以前の前提——民主政によって調達できない前提——がないと機能しません。その前提とは、ジャン・ジャック・ルソー『社会契約論』によれば「この決定で自分は良いが、あの人やこの人はどうなるのかと想像して懸念すること」。決定による不利益変更で苦しむ人を手当てする動機です。pitié と呼ばれます。

「ルソーの条件」を満たさないと民主政は名ばかりになります。リソースを持つ勝組が勝つというトートロジーになって寡頭制 oligarchy と区別できなくなるからです。民主政が機能しなくなる原因は pitié の消失。つまり人々の感情的劣化です。感情的劣化の原因は共同性の消失です。具体的には、地域共同体と家族共同体の空洞化です。

日本は 60 年代からの「団地化(専業主婦化)」で地域共同体の空洞化が進み、80 年代からの「コンビニ化(新住民化)」で家族共同体の空洞化が進み、特に 90 年代後半からは「ケータイ化(後にスマホ化)」で対人関係一般の空洞化が進みました。社会の全領域から共同性が消えたので「民主政の条件 pitié」は不可能になりました。

1762 年の『社会契約論』が示す「民主政の条件 pitié」はすごい見識です。1755 年の『人間不平等起源論』と併せると pitié を実装できるのは人口 2 万人までと想定されています。彼が生まれ育った当時のジュネーヴの人口です。ちなみに百年余り後にデュルケム『社会分業論』1893 年がこれらスモールユニットの有機的連帯を提唱します。

有機的連帯とは各々のスモールユニットの長所(凸)と短所(凹)の相補的噛み合いです。全てのスモールユニットが同様に揃いの性能を持つ機械的連帯とは区別されます。機械的連帯が可能にするのは生協の共同購入の如きコストシェアに留まる一方、有機的連帯はユニット同士が争うと生存できなくなることを意味します。

ルソーからデュルケムまでの百年間余りで、無政府主義(国家を否定する中間集団主義)の欠点であるホップズ問題——自力救済的ユニット間の軍閥闘争の如き相克——を克服。ユニット内の民主政とユニット間の共和政(分業的補完性)を旨とする社会学主義(国家を否定しない中間集団主義)を主張するように進化しました。

ちなみに中間集団間の相補的噛み合いがデュルケムの国民国家イメージです。個人間の相補的噛み合いがマイケル・サンデルの共同体(中間集団)イメージです。合わせて、個人の相補的噛み合いからなる民主的な共同体・の相補的噛み合いからなるのが共和的な国民国家。それが今日の欧州の「補完性の原則」に原型を与えました。

「あの人は・この人はどうなるかを想像して気に懸ける」 pitié の感情的能力は日本では新

住民化の 80 年代に急に劣化します。危険遊具の撤去・屋上ロックアウトが進み、団地の子・農家の子・店屋の子・医者の子・ヤクザの子が性別や年齢を超えて混ざって遊んだ上でヨソんちで御飯を食べたり風呂に入ったりする営みが消えます。

「あの人は・この人はどうなるかを想像して気に懸ける」感情的能力は、戦間期のプラグマティズム社会学者ジョージ・ハーバード・ミードによるとゴッコ遊びが培う「なりきり role taking」の能力です。新住民化で「カテゴリーを越えてフュージョンする」機会を奪われた子が成人するのが、対人関係一般が空洞化する 90 年代後半。

96 年から KY(空気が読めない)を恐れてキャラを演じる営みが大学生など若者に広がります。「政治の話」は価値観の分岐を、「性愛の話」はモテと非モテの分岐を、「趣味の話」は好みの分岐を、露わにすると避けられ始めます。それは 09 年からの SNS 化の裏垢に引き継がれ、今の大学生の大半は悩みを話せる友達がいません。

96 年からの四半世紀で性的退却が進みました。高校生と大学生の男女の性体験率は半減。今も急降下中です。政府は少子化対策として子育て夫婦の支援を掲げますが無意味。過去 40 年間一貫して夫婦に平均 2 人の子がいるからです。少子化の原因は未婚化。未婚化の原因は性的退却。性的退却の原因は対人関係一般の空洞化です。

孤独死が話題になったのは 2004 年。2020 年から二年余りのコロナ禍を挟んで孤独死の件数は 3 倍増。在宅死の 4 人に 1 人。過半数は 60 歳未満の現役世代。9 割が男。SNS が途切れても訪う友達がいない者が孤独死するので、女は直ぐに発見されても男は腐乱するまで発見されません。孤独死は対人関係一般の空洞化を象徴します。

2018 年から話題になった「つながり孤独」。SNS のつながりが入替可能性を感じさせて孤独を募らせる事実を示します。戦間期に哲学者マルティン・ブーバーが述べた通りです。人は入替可能なソレ=replaceable it として扱われると孤独を感じます。入替不能なアナタ=irreplaceable you として扱われて初めて孤独を免れることができます。

最近では集団指導塾ならぬ個別指導塾が大半です。生徒 3 人にチューター 1 人。理由は勉強の動機付けがないから。ゆえに時間の多くをメンタルケアに使います。ちなみに友愛も性愛も含めて「悩みを話せる関係」を忌避する理由を若者に尋ねるとメンタルケア問題——メンヘラに依存されたくない——が浮かび上がります。

でも、悩みを話せずにキャラを演じるテンプレ的關係で、孤独が増す。孤独は免疫力を下げ、体を蝕み、鬱化や被害妄想化で心を蝕みます。孤独は尊厳(自己価値感)に触るので認知的に整合化されます。孤独なんじゃなく周囲は敵だらけだから自己防衛するのだと他責・他罰化し、また孤独を退屈に読み替えて刺激を求めがちです。

孤独による不安は、それを埋め合わせる反復行動をもたらします。不安を「スゲエ日本」への所属感で埋めて「在日や中国人は敵」と他責・他罰化して噴き上がるのがウヨ豚。恋愛の挫折の繰り返しによる自罰を「男は敵」と他責・他罰化して噴き上がるのが糞フェミ。真理や価値の主張に見えて、神経症の症状。説得できません。それが 2010 年代に「ポストトゥルース」「オルタナティヴファクト」と自称・他称されます。SNS 上に「チャット BOT 的=言葉の自動機械的」な神経症的反復として目撃できます。国政はもとより、「まちづくり」ではこの種の輩が住民民主主義を歪めるので恐ろしいけど、この種の輩の量産は「まちづくり」の失敗がもたらしました。

野口：そろそろ。

宮台：纏めると、「民主政の民主政以前的な前提」は感情的豊かさです。感情的劣化が民主政を歪めます。感情的劣化の原因が、「カテゴリーを越えてフュージョンした体験がない」という「育ちの悪さ」。「育ちの悪さ」をもたらしたのが、「まちづくり」の失敗による「都市や郊外のつまらな

さ」です。以上が僕の考えになります。

野口: よくわかりました。民主主義の前提となる体験は、都市の劣化が失わせたとも言えそうですね。それは、参考資料の中で蓑原さんが書いておられることとも一致しています。蓑原さんいかがでしょうか？

蓑原: 今話を聞いて思うのは、僕にとって、「なりきり」って何だということです。例えば、1945年の8月15日以前、日本はどうだったかという、一億一心でみんなが戦争をして、当然のように特攻隊として突っ込む。一億一心だから、本土決戦でみんな死ねばいいというような、そういう「なりきり」型の世界だったわけですね。

それが1945年の8月15日を契機として、そして、アメリカの占領政策をどう評価するかという議論はあるけど、新憲法ができて、日本は「なりきり」の目標を変えた。変えた時の日本の都市はどうだったのか。4m幅もないような道路で街はできていて、そこに木造の建物だけがずっと密集していて、物理的に言うと非常に貧しい環境にあった。それが徹底的に空襲でやられて、それをなんとかして、近代国家に追いつこうとしてやってきた結果が、その成れの果てが、実は渋谷である。渋谷というのは、残念ながら心配りに乏しい街だと思うけど、民間の企業として一生懸命、近代化をやっている。例えば大丸有であるとか、あるいは日本橋であるとか、あるいは森ビルの六本木であるとか、なんとかして、近代化の流れを進めようとしている。しかし、それが行き先不安、行き止まり感情を与えているのではないか。それがまさに今、宮台さんが言っている感情の劣化を招いている原因ではないのか。なんとなく僕らも虚しいなと感じているからそれを、高鍋さんは、リアルな街ってなんだろうというふうの問題提起をしている。そのリアルというものを、じゃあこれから議論しましょうよということが、まず出発点になってくる。

その時にそのリアルの対象になっているのが、今2つの大きな問題があって、1つは、その客観的な対象としての都市という物理的なもののリアルさというのをどう考えるかという問題と、もう一つはそれを眺めている人間の心のリアルさというのをどう考えるかという問題があって、その辺をばらしながら議論していかないと、うまくいかないんじゃないかというのが、最初の出発点です。



蓑原敬

野口：今、大丸有の事を話されました。三菱地所さんは、蓑原さんが賞味と表現している体験ができるまちを、計画によって実現しようと努力されていることは確かだと思います。しかし、大丸有の都市計画は、果たして成功していると言えるのでしょうか？

蓑原：成功しているとか成功していないとか即断する前に、高鍋さんが提起している2番目の都市計画というのは一体何だと考える必要がある。先ほど来宮台さんがおっしゃっているように、都市というのは、制度都市計画とか土木とか建築とか造園とか、そういう分野別に取り込まれてる問題ではなくて、人間の生活全体をカバーしている領域だから、その領域をどう考えるかというふうに考えないといけない。俯瞰的に物事を見て、いろいろな専門職をつないで、それと一緒に物を作っていくというシステムが、実は都市計画なんだけど、今の制度都市計画は、そうっていない。今は、そのような俯瞰的な都市計画をアーバニズムという言葉で呼ぶのが一番普遍的だから、アーバニズムという言葉を使うとすれば、実は日本では本来都市計画がアーバニズムであるはずなのに、そしてヨーロッパでは少なくともそういう観念で、もはや部分的なセクターの努力とか、先ほどの話じゃないけど、民間が何かをやるのは素晴らしいことだという話ではなくて、民間も役所も市民も一体となって物事ができていくという、プロセス全体の枠組み問題なのに、そういう議論になっていない。だから、現象だけを見て大丸有が良いか悪いかなどと即断しても意味がない。

残念ながら日本の都市計画は、ヨーロッパでは実現している、そういう俯瞰性がある都市計画はない。縦割りのセクターを超えて横断的、俯瞰的な仕事をしている人もいないし、場もない。役所の中でも総理大臣もやった細川元熊本県知事が言ったように中央集権型の縦割りシステムが地方自治体の津々浦々まで行きわたっているから、横断的、俯瞰的に地域とか民主的に物事を現場から作り上げていくという構造がまだ存在していないのです。

その結果生まれている都市空間の虚しさが今まさに噴出している。その結果が感情の劣化だというふうに宮台さんはおっしゃっているし、僕もそう思う。そういう意味では民主制が腐敗しているとも言えるけど、僕の年代の人間は1945年の8月15日を経験して、民主主義というものがあるという可能性に賭けて生きてきていて、民主主義がなかった日本から、民主主義をどう育てるのかという実験をしてきている。その中で、これから人口が伸び経済が発展し、人が豊かに生活をする場を作るかということに人生を賭けてきている。その中で、いろいろなセクターの人、土木、建築、造園の専門技術をもった人、法律や経済、制度を創り上げている人たちが力を合わせて、いろいろな人が協働して、物事を作ってきたという60年間を経てきた人間だから、日本の近代化の成果を認めざるを得ない。自分たちがやってきたものもあるし、それによって我々の生活は明らかに安全で便利で快適になったと思っているから、今の都市がいかに虚しくても、その責から逃れられない。

そうして出来た結果がどうかと言われると、あの渋谷がそうなのかよということになると、どうしたって、あれリアルじゃないよねと言いたくなる。じゃあ大丸有とか日本橋とか、あるいは六本木でやっていることはどうだったか。実は虎ノ門。六本木をああいう形に創り上げていった最大の元凶の一人が森稔というかつての森ビル社長だった。その森稔は実は僕が大学に入った時の同級生でした。文学に傾倒し、小説を書いていました。しかも僕が体を壊して1年休学したら彼も1年休学をしてということもあり彼とは仲が良かった。まだ一つも森ビルがない時代からです。彼は明らかに文化人、教養人として自分がどういうふうに世の中に貢献できるかのことを考えながら仕事をしてきている。横浜市立大学の先生だった彼の親父の森泰吉郎氏の影響も大きい。金儲けのためにやっているのではなくて、地域に根付いた経営者として、まちづくりをやってきたのです。

その当時は三井とか三菱とかいう財閥系の不動産会社はいわば系列の不動産管理会社であって、自分で土地を買って開発をして街を近代化していくというプロセスに直接関与はしてい

ませんでした。アメリカにはあったけど、日本にはデベロッパーはいなかったんだけど、森ビルはデベロッパーを始めたんです。その結果が虎ノ門、六本木なんですね。

だから森泰吉郎さんは、不動産事業経営者として社会に貢献すると思っていたから、東大の高山英華さん、建設省（当時）OBの沢田さん、東京都庁OBの鈴木さんなどを集めて財団を作り、まちづくりについての研究をさせていた。僕もその一端に加えさせてもらったことがある。

大丸有とか日本橋なども担当者は同じような志をもってやろうとしてるんじゃないかと思うんだけど、1980年代以降特に、株主優先の民間資本になってしまったから、利潤だけが問題だという資本の論理によっては、経営者の理念などどこかに行ってしまう。

それでも、今日本で俯瞰的なことをやっているのが実は民間ディベロッパーなんじゃないのか、でもそれは本当にリアルでサステイナブルな都市計画に繋がっているのか。本当に俯瞰的なことをやっている都市計画ってどこかにあるのか、それを築き上げるために僕らは現場でどう動いたらいいのか、そういう問題提起を僕らはしているのです。

実は本来は公共と市民が一体となってやるべきようなことを民間資本が主導としてやっていて、そしてそれが今の日本の都市のアメニティを作っている、それがリアルであるかどうかという議論を今我々はしなきゃいけないし、その時に一体民間と公共の関係とか市民の関係をどういう風に作り直すかという根源的な問題に直面しているのです。

民主主義がなくなっちゃったと、簡単に宮台さんはおっしゃいますけど、私が子供の頃は民主主義もへチマも無かったですよ。

私たちの先生は軍服を着てサーベルに白い布を巻いて、そのサーベルで僕らの頭をぶん殴るような先生だった。そういう時代が一夜にして民主主義の時代になったわけで、それが期待通り機能していないのだけど、それをどうやってこれから創り上げ、積み上げていかなきゃいけないかという根本的な問題です。その根本問題を抱えながらも、その中で、どうしたら俯瞰的な議論ができるか、そういうことを議論しなきゃいけない。

野口：ありがとうございます。確認したところ、参考資料の10行も進めていないことがわかりました。先を急ぎます。

「俯瞰的な」という意味では、ドバイやシンガポールも俯瞰的な都市計画がなされていることに違いありません。しかし一方で、蓑原さんは「Fake(まがい物)のまちではない「まち」が欲しい」と参考資料の中で書かれています。そして、「欧米でも再開発で「まち」を根こそぎ変えるのではなく、「まち」を守り、再生させることも考える包括的なアーバニズムに転換した」ということも紹介されています。つまり、ご紹介いただいた俯瞰の議論には、その先があるということをおっしゃっておられるように思うのです。

宮台：包括的アーバニズムの最終目標「リアル」は環境倫理学者ベアード・キャリコットの「人間の尊厳を支える街」そのものです。彼は京都学派を学んでインディオを研究した全体論で知られます。いわく環境開発の考え方が3つある。功利論と義務論と全体論。全体論は80年代のイーファー・トゥアンの「空間から場所へ」が象徴します。

場所 place を厳密に定式化したのがキャリコット。空間 space は機能で定義されます。機能は道具性で定義されます。道具性は人間の個別の行為で定義されます。初期ハイデガーの図式です。でも晩期ハイデガーが人間中心主義だと反省した。それで言えば功利論(功利主義)も義務論(カント主義)も近代西欧の人間中心主義に過ぎない。

功利論は「最大多数の最大幸福」。効用の成員全体の集計値の最大化。成員として生物も数えよと主張したのがピーター・シンガー。義務論は「人として扱え」。無条件命令の如き道德の対象とすることです。そうした対象に生物も数えよと主張したのがトム・レーガン。キャリコットいわく双方とも人間中心主義ゆえの欠点がある。

功利論の「全体集計の最大化」は、屠殺を肯定してペットを大切に作る人間中心の御都合主義。実際ソレでやってきてコレだろうと彼は言う。義務論の「人として扱え」も、「人が生物を見る」ように「生物が人を見る」訳じゃないのに、「人の見方」を特権化する。人種差別と相似形。人に白人、生物に黒人を代入すれば分かる。

人間中心主義を克服するのが晩期ハイデガールの全体論。空間より場所。「場所の生き物としての全体性」が人の尊厳(自己価値)を支える。場所は人より大きく寿命が長い。人のライフスパン(人生尺度)で開発して「生き物としての場所」が死ぬ。場所の要素(環境子)には人も生物も無生物も含まれる。森や山や川やその配置も。

そこには山本七平が言う視座の二重性がある。「人としての人の視座」と「全体としての人の視座」。蓑原さんの「人倫を見る人の視座」と「物理を見る人の視座」の二重性も関連します。畢竟、「全体としての人の視座」がリアルで、「人としての人の視座」がフェイク。ただし、全体は、物理を含みつつ物理に還元できない超越です。

尊厳を幸せに読み替え、「場所の生き物としての全体性」が「幸せ」を支えるとすれば瞭然。幸せという目標に照らして「人としての視座」はフェイク。「全体としての視座」はリアル。でも「人としての視座」は自明で見え易い。「全体としての視座」は非自明で見え難い。だから全体にアプローチする人類学・宗教学・生態学が要る。

これは語彙力(意味論)の問題です。都市計画家は語彙力不足。ショボイ視座しか取れない。人類学者デビッド・グレイバーの遺作『万物の黎明』いわく、17~18世紀の啓蒙思想は、主に16世紀からの「アメリカ発見」つまりインディオとの接触がもたらした「インディオの賢人による西欧文明の軽蔑」への、ショボイ応答です。

インディオつまりネイティブアメリカンへの「なりきり」で見える世界を、京都学派つまりハイデガールの語彙で記述したのがキャリコットの全体論。人を離れた俯瞰の全体的な発想で初めてリアル=「力を与える場所」を護持できる。人としての発想による開発はフェイク=「力を奪う場所」を量産するに過ぎない。明瞭な論理です。

本来なら、virtue(力を与える)、virtual(力を与えるように「見える」)、などを巡るエピモロジーを展開したいものの、時間の関係で想像にお任せして一言。「力」の概念は人類学や民俗学の肝。折口信夫は、定住が要求する法生活が力を奪うので、「ケ(気=力)→ケガレ(気枯れ)→ハレ(晴れ=祝祭的回復)」の循環があると考えました。



宮台真司

折口は柳田國男らとの読書会を通じてフレイザー以降の人類学に親しんでいます。帝国主義的領土拡張戦が生んだ人類学は、16世紀の「インディオとの接触」の等価物。その人類学が産業革命晩期の西欧人間学を生んだ。ウェーバーの「没人格と人格」、ブーバーの「ソレ it とアナタ you」、フッサールの「物世界と生活世界」などです。

それぞれ等しく「力を奪うもの」と「力を与えるもの」の対比です。どれも「力を奪うもの」は入替可能 replaceable、「力を与えるもの」は入替不能 irreplaceable として定式化されている。これこそ先住民との接触がもたらした全体知です。映画批評家の僕が過去四半世紀「つまらない」と「ワクワクする」の対比で示してきたものです。

以上は現代哲学史半期 15 コマの圧縮です。初期西欧哲学史や初期キリスト教史の「エジプト的=律法的=利己的利他」対「ギリシャ的=内発的=利他的利他」の二項図式としても展開できる。その意味で普遍の思考図式です。それを踏まえて「場所の生き物としての全体性」をより深く理解していただきます。切口はアニミズムです。

場所の生き物としての全体性は、環境子の概念に見るようにアニミズムに関係します。アニミズムは万物に魂が宿るとするキリスト教的妄想ではない。万物に見られているという体験です。渋谷再開発から例を取ると、PARCO ビルが三年前に新しくなりました。PARCO ビルに見られてワクワクする、なんてことはあり得ません。

ところが想像してみましよう。あそこが廃墟になった図をイメージすると PARCO ビルから見られる体験を思い描けます。なぜか。今世紀に入ってネットを含めて廃墟ブームです。そこにあがったイメージの大半はボタニカル(植物的)です。草木に覆われて森に埋没するイメージ。短編アニメ『陽だまりの詩』1997年が代表的です。

なぜ廃墟がボタニカルか。哲学者は考えてきた。僕も考えてきた。でも建築家や都市計画家は考えていない。キャリコットを知らないのも関係する。答え。樹や森のライフスパンはヒトを含めた動物より長い。だからボタニカルな廃墟はヒトのスパンに収まらない。そこには計画性ならぬ自生性がある。だから「廃墟に抱かれる」。

僕らの一部がバラックに惹かれる理由も同一。90年前後のバックパッカー時代に次のように考えました。日本に帰化して『鉄コン筋クリート』を監督した元ニュー Yorker のマイケル・アリアス。かつての下北沢や吉祥寺のバラックに惹かれたと言う。蜘蛛の巣が張る碍子、染みの広がった壁、崩れた軒先が、生き物の様に見えたと。

日本人を含めたアジア人の多くは計画都市に劣等感を抱きます。王宮や庭園を除くとバラックだったからです。でもキャリコットは違うと言う。計画都市ならぬバラックは「森」。ライフスパンはヒトより長い。計画性ならぬ自生性のなせるワザ。秩序ならぬ無秩序的秩序のなせるワザ。バラックは「森」同様、より高度な秩序だと。

美学者の廃墟論やキャリコットの人類学的思考の教養があれば「ヒトの尊厳を支える街=フェイクならぬリアルな街」が何なのかは自明です。ヒトはルーティンの外に出て世界に抱かれていると感じると、力を回復してワクワクし、神経症的反復強迫を脱して感情的安全を得ます。これは進化生物学的に達成されたゲノムの傾きです。

ナンパやフィールド調査で全国を巡った 80 年代に感じたリアルな街を思い、『計算不可能性を設計する』2004年を書いた。計算不可能性を設計する外部基準は人々の体験です。設計は体験デザインたるべし。それを踏まえて親業教育本『ウンコのおじさん』2018年を書いた。教員も演出家も建築家も都市計画家も体験デザイナー。

施主(資本)や行政にプロバイディングしてきた都市計画家は、資本主義の素朴な理解が原因で、精神分析家アドラーが言う目標混乱に陥った。外部(共同体や身体)を侵食する資本の自己増殖で、施主や行政(を支える民意)のニーズが劣化し、ニーズに応えたプロバイダーも劣化したから。都市計画家の劣化メカニズムは自明です。

野口：同感です。安全・快適・便利によって漂白されてしまったまちでは、どこで何をしようとも、私たちは置き換え可能な存在になってしまいます。それは、蓑原さんの原稿にある「Fake(まがい物)のまちではない「まち」が欲しい」と同じと考えてよろしいでしょうか？

蓑原：まさにそこが問題ですね、私も昔の日本のまちの方が懐かしいし、昔のような空気がある街を、地震や火事に強く、焼けないで安全で便利になるような形、近代化という言葉がいいかどうか分からないけれども、そういう街に作り変えた方がいいと思っています。じゃあ本当に、今おっしゃったような街というのは、どういうメカニズムのもとに作られていくのだろうか。第一の問題は持続性の問題です。近代化の結果、巨大な建物がどんどんできちゃっているが、その巨大な建物を壊す時に、あるいは壊した後どうするだろうかということについては全く考えていない。

今、宮台さんが指摘したように、時間の関数について、本来考えなきゃいけない歴史の時間とか、あるいは人類史の時間とか、あるいは自然史の時間とか、そういうことを無視して、目先のことしか考えなくなっている。時間の関数が短くなっているけど、実はそれは資本の時間なんですね。金を短期間の間に増殖しなきゃいけないということでやるから、そうなっちゃうわけ。

でもそれが本当にアーバニズムの基本かという、僕にはとてもそうだと思えない。少なくとも僕らが学んできたヨーロッパの都市計画の中で、先端的なところではそんなことは言っていないわけです。

一つ具体的な例を申し上げる。中島さんという人が非常に丁寧にデンマークの例について書かれているので、そこからの話なんですけども、例えば今コペンハーゲンのノーハウンという北港ですね、北の方の港湾地域の再開発をやろうというときに、6つの基本的な戦略というのを開発方針として据えている。第一の戦略は、低酸素化時代に対して、どういうふうに備えるかということ。第二と第三の戦略は、そこは実は完全に港湾地域で、港湾の荷揚げとか倉庫とか工場とかの施設があったのだから、25年かけて人口4万の街にしたいのだけど、その地区の歴史の痕跡を止める。

第四の戦略は、ブルー&グリーンという、その島の再開発にあたって、水辺と緑のネットワークを作り上げること、五番目、六番目の戦略というのは、人間の生活を自動車に依存する時代ではないということをはっきり認識する。すると結局人間というのはやっぱり歩いて暮らす動物じゃないか、そうすると15分間で歩ける距離ぐらいが人間の距離で、それを単位に街を積み上げていく。人が15分で歩く距離は400mだから400mぐらいの範囲で生活し、エネルギー補給を行う単位を作ったほうが良い。その考えの延長上に街の維持だけでなく、再開発もしていく5分間で歩ける単位を考えている。必然的に、大規模な一挙開発はダメだということになる。だからそういう意味では、マイクロネットワークを繋いでマイクロネットワークで全体をつないでいく仕組みにするべきであり、電力をマイクロの単位で作りだしそれをつないで配るといこととの原理と同じ原理でもって、もともとの開発の単位自体を小さな形に分割をしてアーバニズムをやっていくということがサステナブルなまちづくりなんだということ、ちゃんと都市計画の戦略として掲げている。

きちっと都市計画の戦略として、先進国ではやられているにも関わらず、日本では全くそういうことになっていない。しかも残念ながらもっとも俯瞰的にやられているのは民間大資本による再開発でしかないというところに矛盾がある。我々はアーバニズムの中に希望が持てないわけではない。アーバニズムを通して今おっしゃったアニミズムの問題とか、もう一つ隠れた問題としての人の身体性とか、人の市民的義務の問題が絡む。一体、街づくりの過程の中に、どれだけ市民とか単なる消費者ではない生活者としての人が巻き込まれ、関与しているのか。これからのアーバニズムを考える上で、どうしてもそれを考えなきゃいけない。

そういうことをちゃんと勉強して、そういうことをちゃんと学んでやってかなきゃいけないにもかかわらず、なぜそれがやられてないかということが問題だということを提起したいわけですね。

野口：何故やられていないのですか？

蓑原：わかりません。物事を俯瞰的に考える上で、例えば道路を取り上げてみましょう。1960年くらいの断面で切ってみると、幅員 5.5メートル以上の道路ストックは非常に少なかった。それを1980年の断面と比較すると、幅員 5.5メートル以上の道路延長は6倍になっている。だから5倍くらいの道路を新しく作らなきゃいけない時には、どうしたって俯瞰的に考えて、マスタープランを作って、設計、施工をやらなきゃいけない。でも今、実は6倍に増えちゃった道路をさらに増やそうと思ったり、道路の中に相変わらず自動車を走らせることを優先するような議論しかしない。そんな都市計画しかしてない。

スマートシティという概念が、だから例えば日本で議論されているスマートシティと、デンマークで議論されているスマートシティとは全く違うんだけど、その違うということすらきちんと議論されていないということが、本当に問題で、それは我々の専門家の怠惰でもあるし、特に僕はアカデミズムの怠惰だと思っています。

野口：とてもよくわかりました。先ほど宮台先生から「民主主義が劣化をしているのは、前提となる体験が失われているから」とありました。そしてその前提とは、置き換え不可能性によって尊厳が得られることと理解しました。今、蓑原さんから「欧州では、そうしたまちを実現しようとする試みがあるのに、なぜか日本では始まらない」とありました。もしかしたらその理由は、日本人が体験に必要な資源を、完全に喪失するかもしれないという危機感を感じていないからではないでしょうか？



野口浩平

宮台：ざっくりした理由は、原生自然 original nature が最近まで豊かで、里山的な生活形式を誰もが思い出せて、ゆえに再帰的に自然を大切にしようという発想が生じたことがなく、今も生じていないからです。自然ないし森との共生が再帰的に思念されないところでは、「ヒトの尊厳を支える街」も公共的テーマになりようがありません。欧州、特にイギリスを見れば、西欧の自然概念の再帰性が分かります。西欧は産業革命期まで自然 nature の概念がない代わりに万物 physis の概念がありました。physis を自然と訳したり physics を自然学と訳すのは誤りで、各々万物と万物学です。万物とはあらゆる全体。対立概念は nomos つまり法共同体(同じ法に従う共同体)です。

イギリスは産業革命期以前に羊毛業による牧草地化で原生自然が衰滅。産業革命期のエンクロージャで残った原生自然も壊滅した。かつての生活形式が失われ、回復すべき風景としての自然が再帰的(反省的)に観念された。ヨアヒム・リッターの埋め合わせ理論です。生活世界の外に立てられた自然。社会と自然が外在し合います。

風景は「生活世界の外にあるイメージ」の謂い。「週末のサウナ」です。それが80年代からのエコロジー運動で環境保護概念に繋がり、延長線上でSDGs概念が生まれます。余裕ある者のつまみ食いの消費であると同時に、だからこそ社会が豊かになって環境保護が活発化しました。それで国立公園への分厚い行政的手当があります。

要約すると原生自然を一度失った経験から生まれた作為 commission。だから市場は投資利益率を、行政は公共性を見込めます。御都合主義的であれ、「失って分かる大切さ」。日本にはそうした歴史的回路がない。だから国立公園の予算は先進国最低です。日本社会は今後も自然を大切にしない筈です。それが文化史的な理解になります。

自然ならぬ民主政についての似た発想を宮崎駿監督のアニメ『君たちはどう生きるか』に見出せる。吉野源三郎の1931年の本が原作とされるのは謎かけです。原作とはどこも似ないからです。謎かけを解くとこの作品の正しい批評になる。案の定、正しく批評できる人がいない。理由は、作為の契機の不在(丸山眞男)によります。

謎かけを解き、正しく批評します。『ダ・ヴィンチ』誌に載せたり様々な動画で喋ったことです。原作は全体主義が顕在化する満州事変の年に書かれました。中小企業の工場を経営するおじさんが主人公に——君たちに——どう生きるべきかを説く。思い出すのが僕の師匠小室直樹氏の言葉「社会がダメになると人が輝く」です。

全体主義は悪い社会。だからそこを生きる人は皆不幸。民主主義は良い社会。だからそこを生きる人はみんな幸せ。「んなわけねえだろ、バカヤロー」と宮崎氏は怒っておられる。全体主義「だから」民主主義を希求する立派な人がいた。民主主義を希求することが人を立派にした。立派な人は、命懸けで価値を貫徹しようとした。

そんな立派な大人に子供が感染した。悪い社会「だから」価値貫徹が他者に影響する。「位置と速度の違い」「速度と加速度の違い」に似る。蓑原さんは民主主義は大事だったと仰る。正確には全体主義的「社会」だから民主主義を大切にする立派な「人」がいた。悪い「位置」に留める圧力に抗った「変化」を求める構えの貫徹。

全体主義の困難に抗って民主主義を貫徹せんとする者は立派だった。ところが敗戦。ヒラメキョロメで「一夜にして天皇主義者が民主主義者になった」後、民主主義がルーティーン化。思考停止で現状を疑わない、価値を欠く者どもの群れになった。「昔と違って何を言ってもやってもよくなったが、あなたは幸せになったか」。

宮崎駿はこの三島由紀夫の問いを再び問う。民主主義がルーティン化し、「いい人」だらけになった。だが「アンタいい人、どうでもいい人」(70年代末の江戸アケミの詞)なのではないか。民主主義の社会でアンタは何でも選べる。それでアンタは幸せになったか。政治であれ恋であれ、何かに焦がれるロマンを生きているか？

「民主主義がない所で民主主義を希求する者の民主主義」と「民主主義の自明性に埋没して

不可能性を希求するロマンを失った者の民主主義」は、同じではない。蓑原さんが仰るのは、後者の「位置」の民主主義ならぬ、前者の「位置変化」の民主主義。位置(社会)ならぬ位置変化への傾動(実存)。自明性と再帰性の違いです。

蓑原：今の問題提起に対して一つ問題があるのは、一体民主主義って何だっというの、僕らは本当に民主主義もへちまもないときからある日突然に、今まで軍刀でぶん殴ってた先生が民主主義と言い出して、僕らが民主主義として議論しだしたっという局面を生きてきているから、いかに戦後に開放感を持つことができたか、いかに民主主義に期待したかっということがあるわけね。

ところが初めから問題にぶつかる。僕はその当時から喧嘩は強くなかったけども勉強はできたから、一応級長さんになる。級長さんになるときに選挙がある。そのときに僕が言ったのは民主主義なんだから、みんなが僕を積極的に支えてくれるなら僕は級長に選ばれてもいいけど、積極的に関与してくれないならば級長なんかにならない、関与してくれませんかこう言って、級長になったら誰も関与してくれないわけですよ。

僕は中学のときからそう思い出してるんだけど、日本人は長い間の歴史的経過の中で主体的に市民として自分の意思決定で環境を直したり、世の中の命運を変えていくというような行動様式を取ってないから、そういうことを皆さんに言っても無理だったのだ。やっぱり級長さんが、あーしろとかこーしろとかリーダーシップを発揮せざるを得ないという構造を持っている。

ところが、世界的に今起きているのは、トランプ現象とかBrexit現象とか、あるいは安倍現象もそうだと思うけど、やっぱりどうも自分で考えるのは面倒だからお任せします、誰かに代わって考えてもらい、気に入らなければ文句だけ言う、人に預けて文句だけ言うというおかしな方向に行っちゃっている。そういうことに対して我々はどうか考えたいだろうか。

もう一方で、お任せ型の典型例が北朝鮮でしょう。みんな今北朝鮮の、金正恩がやっているようなことを見てひどいなと思っているかもしれないけど、あれよりもっとひどいことを実は日本でもやってたんですよ。そのことを忘れてるだけなんです。

日本人の中にあるのは、実はああいう全体主義的な仕組みの方が、自分としては気分が落ち着くんじゃないかと。だからその頃言われていたのは、分をわきまえろと。身分の分ですね。ある種の階級性を押し付けるということよりも、その分として幸せに生きるという哲学が含まれていたから、そういう意味での社会というものが、ある種安定的にあったということ、僕は戦前の社会で知っているから。同時にそれをひどく窮屈で嫌だとも思っていた。

そう考えると、本当に、日本とか、あるいは北朝鮮とか、あるいは今のプーチンのロシアとか、習近平の中国とかいうところで、西欧型の個人の主体性に根差した民主主義というのが可能だろうか、ということについて、今僕は疑いを抱き始めている。

でも、今の人新世問題という問題、人と自然とのやりとりの問題をどう組み直すかという問題に関して言えば、西欧型の科学的思考と民主主義を信じない限り、人新世問題を解く方法が他にはないかもしれない。どうしたらいいんだろうかということが僕には分からない。そこが第一の問題提起です。

第二の問題提起は、今の森林の問題について。今宮台さんはそうおっしゃるけど、実はキャリコットだって、日本というのは今ひどいことやってると指摘している。だけど歴史的に見ると、日本というのは非常に優れた軌跡を持ってるよね、だから可能性がないわけじゃないよねって書いてありますよね。

そういう意味で言うと、実は最近のモリス・バーマンという人が書いてる、『神経症的な美』とかいう本があるんだけど、その中で、今日本は先進国じゃないかと。なんだかんだ言いながら、低成長と言いながらみんながそれほど、そんなにひどい極端な所得格差が始まっているわけでもないし、自然破壊の速さから言っても、ヨーロッパとかアメリカとか南米なんかには比べる

と、はるかに日本はまだ優雅にやっていると。そういう意味で言うと、日本は次のポスト近代の先進国じゃないかということを使う人も出始めてるくらい。

野口：蓑原さんが今おっしゃったことは、先ほど宮台先生がおっしゃったことを現実に体験したということですね。結局、窮屈に感じていた全体主義から民主主義に変わる瞬間が一番輝いていたわけです。輝きが失われたのは、その後を引き受けた我々の問題でしょう。ただ、蓑原さんが紹介された「みんなから選ばれて級長を引き受けたにも関わらず、誰も手伝ってくれようとはしなかった」というエピソードにあるように、いまだに日本には、民主的に決めたことに責任を持つという作法は根付いていません。一方日本には、自然を自分たちと一体的なものとして見做す価値観があります。それは、自然と計画的に対峙しようとする欧米のやり方とは明らかに違っています。

宮台：まず、欧州の自然観は絵葉書を眺めて失われたものに思いを馳せるランドスケープ論。キャリコットが批判した人間中心主義です。日本は原生自然に恵まれた。だから失われたものに思いを馳せるランドスケープ論がない。つまり人間中心主義がない。とはいえ、万物の各要素一体化して痛みを自分事化する営みも疾うに消えている。

旧列強で日本だけが自然を大切にしない。移住や開発で自然が失われたら自然信仰が終るからです。移住や離散に見舞われたユダヤ民族は、自然と無関係な唯一神の命令に従って生活形式を持続し、民族的同一性を保った。部族神が部族連合で習合した多神教は、部族神が自然に関連するので、自然信仰ほどじゃないものの脆弱です。

原生自然に恵まれた日本は自然信仰=八百万の神がずっと続いた。社会と自然が相互嵌入する里山的生活形式がある間は事実的=非規範的に自然を大切にしました。でも無規範な開発で里山的生活形式が消えたので社会から宗教が消えます。無規範性とは、「価値的貫徹」の構えがなく、環境変化に「学習的適応」の構えを示すことです。

ヒラメキョロメや空気への負け易さに繋がる価値的貫徹のなさは、縄文の地政学に由来する。狩猟採集の縄文時代から山林が覆う中で小さな沖積平野に分かれて定住。狩場を争う殺戮戦がなく、共同体同調規範(ヒラメキョロメ)はあれ共同体存続規範まで至らなかった。村の存続に固執しなくても各人が開拓移動すれば済んだ。

多くの社会は共同体存続が困難で、存続に命を賭す者を尊び、裏切り者を排除・殺害してきた。それが共同体存続規範をもたらした。進化生物学的思考です。原生自然が豊かな日本は共同体存続が容易で、共同体存続規範がなく、価値的貫徹(価値)より学習的適応(事実)が優位。結果、空っぽな日本(三島由紀夫)になった。

野口：江戸時代は階級社会でしたが、圧政によって庶民が苦しめられるということはありませんでした。また、戦後日本を占領した米国も、日本人を残酷に扱うということとはしなかったので、敗戦国として惨めな思いをさせられることもそれほど多くなかったようです。これまで私たちは、圧政に苦しめられることもなく、恵まれた自然環境の中で豊かに生きることができてきました。ただ、蓑原さんがおっしゃったように、政治的に追い詰められた経験がない私たちは、意思決定に責任を持って参加するという作法を持っていません。

しかし一方で蓑原さんは、日本に対してアンビバレンツなお考えを持ちのようにお見受けします。先ほど、日本は近代化の最先端かもしれないという説もご紹介いただきました。日本が持っている、制度や計画ではない独特の自然観や共同体のあり方に、何らかの希望を感じておられるのではないのでしょうか？

蓑原：希望を感じたいんだけど、本当にそうかどうかは実はわからない。やってみなきゃ

わからないんですよ。去年の元旦の新聞で、イヌイトがどういう生活スタイルを持っているかという対談が出た。イヌイトが、氷原に旅立つときに、自分はその氷原の中で生き残るかとかかわからない。それを、わからない「ナルホイヤ」って言うんだけど。だから、例えば、30日間の旅をこれからしなきゃいけないとか考えるときに、15日分の食類は持つけど、あと15日がどういう形で与えられるかわからないけども、自分は氷原にある資源を信じて、そこで獲物が獲れるということをして信じて旅立つんだと。ナルホイヤって言いながら、彼らは未来に向かってちゃんと決然と旅立って氷原に出て行くわけですよ。我々もそれしかしょうがないんじゃないかと。実際わからない。

最近出てきた、ジェレミー・リフキンの『レジリエンスの時代』なんていう本を読むと、リフキンなんていう人は、今まで人類の未来について、展望的な明るい議論しかしてこなかったのに、今、非常に暗い認識しか持てなくなっている。本当に人が人新世を乗り越えられるかどうか、よくわからなくなっているところにまで立ち至っているということをはっきりと意識した上で、じゃあどうしたらいいかという展望を語っている。彼の主張は、やっぱり田園に帰ろう、農業をもう一度やろうと、森林との共生をちゃんとやろうというような主張になっている。僕も何十年後になるか知らないけど、日本も必ずそうなると思います。

例えば僕が生まれた1930年代には、日本の人口なんて、5600万ぐらいしかいなかったんですよ。それが1億3000万を超えちゃって、今がピークでどんどん下がりつつあるけど、あと何十年かすると、確実にまた5500万ぐらいになるんです。

それをやめようと思って、どうするかというと、子どもの出生率を一生懸命上げようとか言っているけど、子どもが増えるわけがない。日本は外国の人を大量に移民ができるかということ、これはやらないし、来ない。そうすると、確実にそういう形になっていく時に、じゃあどうなるかということ、さっき廃墟になるって言うけど、廃墟にならないんですよ、日本は。森林になっちゃうんです。間違いなく自然が豊かだから、森林になっちゃうんですよ。だからそうすると森林に戻ればいいという話。それをどうやってうまく戻すかという話になる。

だけど面白いのは、最近の新しいビルなんていうのはビルの中にみんな森林作りに熱中し始めてますよね。そういう意味で言うと、日本人というのは、森林との近接から言うと、世界的に見ても非常に近い民族で、それは例えば上田篤さんが、随分前にそういうことを言ってますけど、日本人というのは、生まれた時から、自分とまず遠い自然という形で山があって、山の向こうがあって、それは遠い、行かない場所だと。それから中自然としての里山があって、それは人間の手が入って、人間が一緒になって共生する。だけどそれだけじゃなくて、家の中に鉢植えを吊るしたり、それから活花をしたり、自然というものを非常に身近に揃えて生きてるじゃないかと。こういう姿勢が、例えば彼の住まい論の中にも出てくるんだけど、私はそういう意味でも、可能性というのに賭けたいと思っています。

そんなこと言うと怒られるかもしれないけど、今やってる事務所ビルっていうのは大量にできて、これは競争社会の中で資本の論理からこれからはどんどんできるかもしれないけど、僕はもう確実に供給過剰でクラッシュが来て、空き家だらけになるだろうと思っています。それは今までの長い経験の中でそういう時期がありましたから。それをやってる人たちに聞いても、自分たちが本当にそういうデマンドの確かさというものを確信した上でやってるかということ、そんな風に思ってる人は殆どいませんよ。だけどみんながやってるからやらざるを得ないんでやってるんだっていうようにしてやってる。

だからそうするとどうなるかということ、僕なんかは、例えば1970年代日本がジャパン・アズ・ナンバーワンって言われてこうやった時に、ジャパンマネーがロックフェラーセンターの土地を買いに行くとかそういう話があったわけですよ。その時代って言うとアメリカはひどい時代で、ウォール街の中は空きビルだらけだったんですよ。で、その空きビルをどう使うかっていう議論の視察旅行に行って、僕が見てきたのは事務所ビルを住宅に転用するっていうプ

プロジェクトでした。

で、僕はおそらく日本もこれから、今建っているかなりの部分のオフィスビルはそういう風になっていくんじゃないかと、住宅に転用されればいいんじゃないかと思ってるし、そういう転用もできないオフィスビルがたくさんできるんで、そしたら鶏小屋にするとか。あるいは植物工場にすると、そういうことを考えた方がいい。僕はそれがおそらく30年後とか50年後には、僕の単なる想像ではなくて、現実にならなるといふうに、僕自身の経験からそう思ってるわけですね。だけどそういうことを考えると、日本では自然の近さっていうことを意識して、今我々はそういうことをもう一度きちっと考えた上でやっていけば、我々の対応の仕方っていうのは違うはずじゃないかとも思う。

アメリカみたいなところですら、例えばミシガンのプリントというところでは、都市計画でちゃんと空き家、空き地を束ねて考え、公園とか、菜園農地に戻すとか、そういうことを都市計画でやることをやり始めている。

なんで日本でそういうことをちゃんとやらないんだと思う。これだけ空き家問題がおかしくなってるのに、建てることばかり議論している。空き家を壊しながら、コミュニティを良くしてくみたいな仕組みを考えるべき時代じゃないかと思ってる。

野口： さっき蓑原さんがナルホイヤの話されたじゃないですか。イヌイットが、旅程に必要な量の半分しか食料を持っていかないのは、あと半分は天からもたらされるか、自分が死んで必要なくなるかのどっちかだからですね。つまりどうなるかわからないが、わからないまま旅にでるわけです。ナルホイヤは明らかに計画的な概念ではありません。しかし、蓑原さんはそれを肯定的に捉えておられるように思うんです。先ほど宮台さんは、予測不可能性を設計するとおっしゃいました。私は、蓑原さんがおっしゃるナルホイヤと、宮台さんがおっしゃる予測不可能性とは、同じことを言っているのではないかと思っているんですよ。

宮台： 一口で「人は抗わないとバカになる」。それを弁えるナルホイヤは予測可能性に抗う。弁えない日本人は予測可能性に埋没してバカになる。直近の数理的認知モデルは予測符号化理論。十全な認知にコストを掛けると捕食されたり獲物に逃げられたりするのので徴候だけで行動する。これが予測符号化で、全動物が具備します。

それを数理モデル化したのが予測符号化理論。数理化で AI への実装が企図されるけど、横に置くと、ヒトはある時期から言語的な予測符号化が主軸になります。僕の予期理論の予期に当たる(『権力の予期理論』1989年)。文明が原生自然の間接化を進めると、言語的な予測的符号(予期)の内だけで物事が生起するようになります。

ところが、予測的符号の外で物事が生起した「驚き」によるストレスが消えるとヒトは「力」を失う。ストレスは生体への負荷。負荷で生体がアクティベートされる。負荷が過少だとアクティベートされない=「力」が出ない。だから定住で「(言葉)で 語られた(法)に(損得)で従う」法生活と平行して、「力」を回復する祝祭が始まった。

先に話した折口図式の認知科学的な基礎です。フィールドワーカーに戻ると、過去四半世紀、高校生のスカートが一番短いのは新潟(笑)。新潟は漁労文化が基底だからです。稲作文化は後で積み重なった。実際お稲荷様も豊作祈願ならぬ豊漁祈願が過半。猟師と同じで、漁師も「予測可能性に埋没してバカになる」と致命的なのです。

冬の日本海は荒れます。新潟に今も漁師がいて、いわく「夜半の暗闇に出漁する際、帰れるかなと思う。家族も、帰ってくるかなと思う」。絶えず死を意識する。それがルーティン埋没を押し留める。ルーティン埋没は「力」を奪う。死を意識する 漁師は「力」を奪われない。常時戦闘状態の文化です。それでスカートが短い(笑)。

僕は喫煙者。健康に悪い？ バカだと思う。最新研究では慢性の孤独感は1日に1箱の喫

煙と同程度に致命的。他方、昨今の喫煙者は喫煙所に閉じ込められ、密集密接ゆえのコミュニケーションが生じる。普段交流しない教員と事務員の間や専攻違いの教員間で仲間ができる。健康を気遣う孤獨な非喫煙者とどちらが長生きかな(笑)。

これが俯瞰の思想。ところが部分だけ見る。健康に良いか悪いかだけ見る。これが愚かなのは、死を意識しないから。藁原先生は体が弱い。僕は襲撃された(笑)。いつ死ぬか分からないなど思うにつけ、僕は90年前後のバックパッカー時代を思い出します。途上国はどこも思春期になると煙草や酒を嗜んでいました。

日本人はそれを見てリテラシーが低いと言う。リテラシー低いのはためえだ(笑)。途上国は医療が不足。周囲で次々と人が死ぬ。いつ死ぬか分からないのに健康を気遣うか。ベイズ統計的な期待利得が低過ぎる。僕らが健康に神経質になるのは、ずっと死なないという前提に立つから。だから価値合理より目的合理が優位します。

つまり現在を道具化する。道具的の反対がコンサマトリ(自体的)。目的合理的=道具的な生き方は、死なない前提で、現在を未来の道具にする(=投資)。死なない前提を疑うと、人は道具的な生を脱し、今を享樂する自体的な生に向かう。長年、日本の幸福度が先進国最低水準なのは、死なない前提で、道具的に生きるからです。

戦間期のマルティン・ハイデガーは「自己を正しく扱う」観点で、コロナ禍のジョルジョ・アガンベン「他者を正しく扱う」観点で、死を意識することを重視します。僕は大学入学前に十回葬式に出た。御遺体と添寝した経験もあります。小室直樹師を看取る際、零時から朝十時まで御自宅と病院の安置所で御遺体と過ごしました。

70年代まで地域が葬儀を出しました。新住民化で地域が空洞化した80年代から、好況ゆえにまだ疑似共同体であり得た会社が葬儀を出した。97年の平成不況深刻化からは会社が手を引き、葬儀が家族の手に戻る。でも地域と家族の空洞化で規模が極端に縮んだ。僕はこれに抗いたくて、六百人が参列する母の大葬儀を07年にした。

規模が縮めば子供の参列機会も減ります。今の大学生には参列経験がない人も多い。参列すれば斎場で御焚き上がりまで一時間ほど飲み食いして、故人の生前を忍んで悼み弔う人々の姿を、目撃できました。従姉妹や同級生など僕より若く逝った人もいて、「人っていつ死ぬか分からないよ...」という科白を何度も聞きました。

死の隠蔽は、原生自然からの間接化と同じで、言語的な予測符号化の外が露出して「驚く」体験からの隔離です。他者の死を遮断されると、現在を道具化する目的合理に過剰傾斜して、若者が感情的劣化を被ります。対照的に、原生自然に接触する体験は、ストレスを掛けることでゲノムの引金を引き、生体に「力」を漲らせませす。

9月に東京国立博物館でテオティワカン・マヤ・アステカを紹介する古代メキシコ展がありました。前13世紀~後16世紀の2700年間、古典期までに限っても後10世紀まで2100年間続いたマヤ文明。古・中・新王国で断裂したエジプト文明より長く続いたこの世界最長文明を見ると、文明の「長寿化条件」と「終焉条件」が分かる。

まず終焉条件。10世紀に文明離脱が生じます。諸説あったけど、日本人科学者の研究で15年間の極端気候が引き金だと判った。「農耕技術(原生自然の間接化)→人口増大→食糧消費・資源消費の増大(極端気候に脆弱化)→気候危機→内乱・戦争→統治の信頼毀損」という過程。圧縮して「原生自然の間接化→極端気候に脆弱化」です。

次に長寿化条件。メキシコ高原の気候ゆえに主作物のトウモロコシはストックに限度があり、それで貧富の差が小さい分、統治は暴力的威嚇を頼らず、暦の精緻化と独占による奇蹟の力を見せました。神官に指示された時期に種播き等の農作業すると成功した。「予言」通りに月蝕・日食も生じた。「威嚇」より「尊敬」なのです。

ストック問題ゆえ、初期ギリシャより遙かに少ない人口の都市国家が連合したので、格差による階層化が制約され、バンドの楽器の持ち替えみたく、農民が商人に、神官が武官になって。

それで統治ユニット内の共通感覚が厚く、大広場で頻繁に大規模な祝祭をして共通感覚を維持した。それで内紛も少なく、統治コストが下がった。

天体と動植物の絵文字を組み合わせた表意文字を使ったけど、記号的洗練を拒んで絵文字のまま留めた。赤(死)と緑(生)がモチーフの装飾や調度はミニチュア的に小さく、畏怖より愛着を重視したのが分かる。階層化や分業化の制約で原生自然の間接化が抑止され、自然信仰を維持して「社会の外=世界」に接触しつつ生きたのです。

蓑原：文明の時間が長すぎるからやめようか。

野口：先ほど、死が尊厳を支えるという話がありました。それを聞いて思い出されるのは、『ベルリン・天使の詩』という映画のことです。この映画は、永遠の命を持っている天使が、自分の命が永遠だから人が感じる価値を知ることができないと気づき、命が有限な人になろうとする物語です。宮台先生がおっしゃる、死が尊厳を支えるということについてももう少し詳しく教えてください。

宮台：同じモチーフのジョン・ブアマン監督『惑星ザルドス』1972年も、死を意識すると生が「ありそうもない=ありがたい(在り難い)」ものになることを描いた。原生自然を間接化し過ぎない=死を意識できるようにするべく、マヤでは、死んで土に還った後にちゃんと再生するよう手を尽くしました。エジプト文明も全く同じです。

日本で90年代に実現したインフォームド・コンセントが関係する。「2年以内に死ぬ」と伝えられるべき理由は「残りの生を自己決定するため」とされる。それだけか。襲撃されて死を意識したら、生を奇蹟だと感じるようになった。インフォームド・コンセントの隠れた理由は、生を奇蹟だと感じて死ぬのが大切だからではないか。

こうも言えます。僕らの生が自体性から道具性へと疎外されるのは、時間が無限だと思うからだ。でも死を意識すると、世界と自分がなぜ在るのか考える。普段は実用的ではないと思えるこの営みが、生を道具性から自体性に引き戻す。ウェーバーによると、道具性は没人格性=入替可能性。自体性は人格性=入替不能性=尊厳です。



野口：分かりました。ありがとうございます。死に触れる事で生の奇跡を知ることができる。そして自分の生が奇跡であると知ることが尊厳を手に入れることにつながるのですね。しかし私たちは、死に触れる機会をほとんど持っていません。私たちにとって、前提となる体験と呼べるものの一つが、死を知る機会と言えるかもしれませんね。つまり、ある場所に死への気づきを刻印することが、まちづくりにとって必要なんだと思いました。

蓑原：僕は、今のような議論、近代化って何だったんだろうという疑問を若い時から持ち続けている。僕の家は結核家族で、僕は子どもの頃から虚弱児童で、大学で喀血をして休学したりなんかしている。そういうこともあるし、子供ながら戦災体験があるものだから、未来が明るいというだけの近代化の理念にはついていけなかった。

だから、人間の尊厳とか何とかいうことを一体誰が発明したんだ、人間なんて尊厳があるはずがないと思っていた。進化の過程でたまたま出てきてね、たまたまこういう形で進化してきたりすぎなくて、勝手に人間が自分を尊厳だと思っているだけだと思っていた。

そういうふうに思い込ませている最大の元凶は、ユダヤ・クリスチャリズムだと思った。人間の魂って永遠だから、お前の体が壊れても魂だけ生きているよと言う特別待遇を神様が与えたから、尊厳みたいな神話が発生していると思っていた。

創造神がない日本の中でどうやって、人の生き様を作るかってことが問題で、実は仏教はそれについて、一つの回答を出している。神様とか仏様とか創造主があって、人間が特別待遇が与えられているのではなくて、今、ここに自然に生かされていることを、どうやって人為的に生きるかということを考えることが、仏教とか禅の一番基本的な議論になっている。だから、今ヨーロッパとかアメリカのいろんな哲学者が、日本とか東洋の哲学について非常に接近し出している。我々にはもはや誰かから尊厳を与えられているとか、我々は尊厳があるなんていう自負心をまず捨てなきゃいけない。

捨てた上で、じゃあなぜ人間はこういう文明をこしらえてきて、我々はこう生きているならば、この文明が潰れるのはやっぱり嫌だなと、何とか持続させたいなと考える。その時、そこからどうやって立ち上がるのかという議論を作り直さないといけない。それが次のポスト近代の課題であり、その課題を解く鍵の一つがアーバンイズムにあると思っているのです。

宮台：三つ異論があります。第一に、僕がいう尊厳に於て、ブラフマン(世界の摂理)はアートマン(自我の摂理)と同一です(梵我一如)。つまり自己の価値は世界の価値。そうした思考は仏教に限られない。現に、カルロス・カスタネダが記す通り、遊動段階・初期定住段階の先住民的思考は、体験を「自分の体験」とは考えない。

第二に、体験を「自分の体験」として個人化する営みはユダヤ・キリスト教に限らない。征服被征服と階層化による共同体を越えた文明化で、互いに同一対象を同様に体験すると予期できなくなると生じる。蓑原さんの体験は僕の体験じゃない。僕の体験は蓑原さんの体験じゃない。だから「各人ごとの心がある」と観念された。

第三に、道具性が奇形的に肥大した時空が近代ですが、「近代の出発点は」ウェーバーが言う通りユダヤ・キリスト教ローカルであれ、「近代は」普遍的。現に資本主義・民主政・主権国家の近代的トリアーデと無縁であり続けられた社会は、民主政を制約する中国やロシアを含めて、ない。理由を、征服被征服を越えて考える必要がある。

道具性が肥大した近代が普遍的なのは、同じ獲物を捕るなら近道しようとする「近道ゲノム」が普遍的だから。安全・便利・快適に多くのゲインを得たがるのはゲノムの性質。だから、近代の出発点であるプロテスタントの倫理がローカルであれ、近代がもたらす安全・便利・快適な近道が万人に好まれて、近代が普遍的に拡がります。

同じことが恋愛に言える。恋愛は「あなたは世界の全て」と部分の全体化に勤しむロマン主

義的営み。「12世紀ルネサンス」と呼ばれるイスラム進入による欧州の世俗化で、「神と人の関係」を「貴婦人と男の関係」に転用して生まれた。さもないと「相手を神の如く超越化して膝を屈する」という奇妙な営みはあり得ませんでした。

かように出発点は欧州ローカル。でも19世紀に印刷術普及で恋愛小説が広がると世界中に拡散。恋愛概念と無縁な国はなくなった。部族段階の続柄婚や階層段階の身分婚が廃れた後に、結婚相手を稀少に指定する装置として機能したのに加え、仏教の法悦に相当する、「超越への拝跪を享受する」ゲノムの基盤があったからです。

「近道ゲノム」も「法悦ゲノム」も、遊動段階に遡る万年オーダーの生活形式がもたらした進化生物学的達成。集団生存確率を上げる文化的生活形式・に相応しいゲノムを持つ個体が残る・とする進化生物学は定説化している。それが、発生がローカルな「近代」や「恋愛」の文化が、なのに一挙に普遍化した理由を、説明してくれます。

蓑原：それで宮台さんに質問したいんですけど、まさに僕もそういうことだろうと思う。そういう形で追い詰められてるから、神様がいないときに、宙吊りの人間が何を手がかりにして立ち上がって行動するのか。今おっしゃったような矛盾を解く鍵として、一つ今思いついてるのは、ここを宮台さんに聞きたいんです。人間って確かに知能を持っているけど、知能は動物でも持っているわけですよ。

最近なんか鳥だって20ぐらい言語を持ってるってことが実証され始めている。そういう意味では知能っていうのはあるんだけど、何でそれが知性になって、人間みたいなものができちゃったかということになったのか。

人間の認知作用で言えることは、感覚器官が自分の周りの世界からの情報を編集して、自分がそういう世界をまとまった形で認識して、その認識に沿って適応することは、はっきりしてきている。生命の個体っていうものは、そういう情報編集適応機能みたいなものを持っている。それが一つあるんですよ。

ところが、ユキスキルをはじめとして、認知科学、動物行動学、心理学などの展開の中で、人間はそういう環世界情報を編集して適応する機能だけではなく、ヒトが環世界の場の中では、人間が持っている欲求をどうやってそこで満たせるかということを探索しながら、その探索をベースとして運動していくという作用の機能を別に備えている。客観的な対象世界があるというだけではなくて、それに人間の欲求を対象世界に投影している姿が二重写しになっている。対象世界は、人間の欲求を映し出す形で存在している。今のような二つの機能が、人間の知性の基本的な機能としてあって、それが知性と感性として現象している。その二つの機能は、統合されていないと考えているのだけど、宮台さん、それは間違っているかどうか。

感性というのは、ルネサンス以降の運動で言えば、ロマン主義の展開として語られていくわけだけど、ロマン主義と知性による科学主義というのは、じゃあ両立するかというと両立しない。それをどうやって統合するかということが、今我々に突きつけられている問題で、そういう議論の統合の過程として実はまちづくりというのは、一番先端的な問題として出てきているんじゃないか、こう思っているんだけど、その辺についてはどう考えておられるのか。

野口：それどうして人間でなきゃならないのですか？他の動物では……

宮台：答えます。統合されていた複数のゲノムの志向が、社会進化によって矛盾を来すから。例えば「近道ゲノム」と「孤独ゲノム」。「孤独ゲノム」ゆえ、孤独になると心身が壊れる。ネアンデルタールらより個体が弱いサピエンスは、協働で生き延びるべく、協働を邪魔する個体を殺してきた。その歴史ゆえの進化生物学的達成です。

当初矛盾しなかった「近道ゲノム」と「孤独ゲノム」が近代化で矛盾し始めた。まず、生活

世界(掟の界限=人間関係)による便益調達より、システム世界(法の界限=市場と行政)による便益調達の方が、安全・便利・快適な近道。だから「近道ゲノム」で汎システム化する。でも、システムが人間関係を置き換えると、孤独になります。

ところが「孤独ゲノム」は「近道ゲノム」より遅効的。認知的整合化が原因。第一に「周囲が敵だらけだから自己防衛するのだ」と他責・他罰化するから。現に孤独な人は被害妄想的になる。第二に、孤独を退屈に読み替えて刺激で埋め合わせるから。いずれも「対処困難な不安を、本質がズレた営みで埋めて、なかったことにする」。

要は、孤独は粉飾決算できるので、人間関係をキャンセルする近道に突進する営みにブレーキを掛けない。だから、死を意識せざるを得なくなってやっと孤独に気付く。でも手遅れ。それが冒頭に話した孤独死の背景。孤独死の9割が男なのも、男女差別ゆえにシステム世界で周辺化された女が、人間関係を手放さないからです。

芸能とヤクザは被差別民がルーツ。ヤクザは在日出身と被差別部落出身が元々多く、一部は差別される港湾荷役が出発点。被差別民は、法を頼れないから掟を頼る。つまり、法が許さなくても、掟に従って仲間を助ける。ゆえに、法を頼れない非常時、一般人が路頭に迷っても、被差別民は大丈夫。阪神淡路大震災に実例があります。

話した通り、認知科学の最先端は予測符号化理論。予測符号化とは、十全な認知をキャンセルして徴候のみで行動する営み。さもないと捕食され、獲物に逃げられる。徴候が予測的符号。僕が20代で考えた予期理論(博論が『権力の予期理論』)に近い。僕は予期の機能を、事前の触知をキャンセルする負担免除だとしています。

蓑原：それは生命原理ですね。

宮台：生命原理だから、19世紀の生理学者ヘルムホルツが「認知の自由エネルギー最小化法則」と呼んだ。復習します。ヒトの予測符号化は言語的。文明化は原生自然の間接化だから、言語的な予測的符号の外を消す。すると予測的符号外の出来事に「驚く」機会が激減。それで生体への入力が過少になって「力」が失われます。

法と掟の話も同じ。法(システム世界)への依存で掟(生活世界)が不要になる。だから法が機能しない時、相互扶助がなくて野垂れ死ぬ。孤独死と一部の災害死がそれ。災害死については片田敏孝氏が掟(津波てんでんこ)を復活、東日本大震災で成功した。さて、システム世界への過剰依存は、友愛・恋愛もキャンセルします。

人間関係全般からの退却は統計的に明白。四半世紀で高校・大学生の男女の性体験率は半減。同期間、悩みを何でも話せる親友も急減。「ネットは居場所であれ、困った時に助けにならない」と答える若者が8割。フィールドワークでは「寝ても覚めても想う気持ち」が分からないと答える大学生が4割。友愛・恋愛は終りつつあります。

大学生の4割が孤独を感じる。コロナ禍後は「将来は孤独死するかも」と思う大学生が8割に増加。だからイベントで「万事 Amazon でポチって足りても、友達を作れ」と話す。すると「友達の作り方を教えて」と訊かれる。「困っている人を助ければ友達になれる」と答える。すると「誰が困っているか分からない」と言います。

ジョック・ヤングの「過剰包摂社会」が関わる。かつて地方出身者やブルーカラーは見掛けで判った。ところが80年代の「高度消費社会化」以降、年収200万の人も2億の人もスタバでユニクロを着てスマホを弄ってラテを飲む。見掛けで弱者が判らないと連帯できなくなるだけでなく、罅迫り合いやマウンティングが一般化します。

若者のワークショップで「時々何か困っていないか友達に尋ねな」と言うと、こんなコミュニケーションが広がっているのが分かる。「何か困ってない?」「困っていないよ」「よかった」。ちょっと待て。困っている奴が、さして親しくもない相手に、困っていると告白するか。「ごめ

んね」「いいよ」のテンプレと同じ。無内容です。

縷々話した「近道化による孤独化」に建築家や都市計画家の責任はないか。あるでしょう。蓑原さんと『まちづくりの哲学』を出したのが6年前。そこで建築も都市計画も体験デザインだと話した。狙い通りの体験をしているかを検証し、検証をクリアしても、本当にその体験で良いのかを、体験者に「なりきる」ことで吟味せよと。

本当にその体験で良いか。その評価は、建築家や都市計画家の思い込みでなされてはいけない。繰り返す。法に閉ざされて掟を失うと、非常時に死ぬ。原生自然が間接化されると、無刺激症で「力」を失う。マンション高階の流産・死産率上昇の最初のデータは70年代イギリス。今は鬱や認知症劇症化や学力低下のデータさえある。

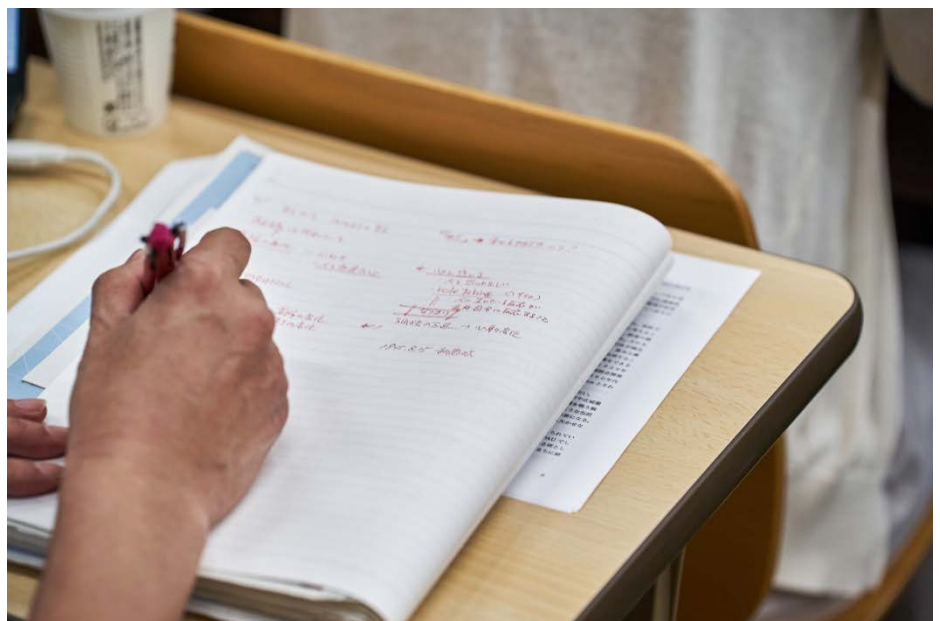
蓑原：やっぱり宮台さんと我々と非常に近いところにいると思うんだけど、宮台さんは、生活世界から、システム世界を壊す方向に向かって動いていくかどうかで、ヨーロッパとアメリカでは姿勢の違いがあるっていうことをおっしゃってますよね。

生活世界からシステム世界を壊すっていうね、そういう具体的なそのモメントとか動きっていうのは、どういう形でならばできるのかとかいうことと、実はその前の、今おっしゃったシステム世界と生活世界の関係性とか、その辺について少しお話いただくと、今のような議論が少しわかりやすくなる。

宮台：生活世界とシステム世界を最初に対向させたのはウェーバー。生活世界は「終り良ければ」の目的プログラムで、システム世界は「手続主義」の条件プログラム。生活世界は全人格的で入替不能で、システム世界は没人格的で入替可能。生活世界で「力」が湧くが、システム世界で「力」を失う。ウェーバーに全て含まれます。

彼は「生活世界」「システム世界」の言葉は使わない。「生活世界とシステム」の言葉を使ったのは60年代ハーバマス。70年のハーバマス対ルーマン論争での用語混乱を整理した宮台が「生活世界とシステム“世界”」の言葉を使う。ただのラベルはどうでもよく、思考の真髄が大切。思考の真髄においてウェーバーに概ね全てがある。

戦間期からその変奏が花開く。フッサールの「物理世界と生活世界」。生活世界という言葉の初出。ブーバーの「それ it と汝 you」。it はシステム世界で、you は生活世界の人のある方。ハイデガーの「道具性と駆り立て」。前者は人の潜在行為が生活世界を与え、後者は人を潜在行為の束に駆り立てる不可視の全体があるとします。



19世紀に戻ると、マルクスが市場(が支える経済=資源配分)を主題化した一方、ウェーバーは行政(が支える政治=集合決定)を主題化した。マルクスが市場経済では労働者も資本家も「自己増殖する資本」の入替可能な駒だとした一方、ウェーバーは行政官僚制では全役人が「手続主義で膨張する組織」の入替可能な駒だとした。

共通の論理がある。「人が道具を使う」から「人が道具として使われる」へ。「生活世界を生きる人がシステム世界(市場と行政)を使う」から「生活世界を生きる人がシステム世界に使われる」へ。「主体の客体化」&「客体の主体化」です。疎外論か物象化論かを横に置くと、産業革命晩期の、事実としての体験の変質を記述します。

どんな変質か。生活世界は、共同体を生きる人が体験する世界(フッサール)。共同体は、対内道徳(掟)と対外道徳(法)が分化した集団(ウェーバー)。対内道徳は贈与優位で、対外道徳は交換優位(モース)。共同体成員は全生活時空を共有し、同一対象を同様に体験すると予期する(マッキーバー)。それらが稀少になったという変質です。

マルクスとウェーバーに戻ると共に位置(量)より速度(変化)を問題視する。位置の微分で速度。その微分で加速度。古典派経済学の限界〇〇概念を踏まえる。マルクスは資本の自己増殖で市場の外が消えるのを危惧。ウェーバーは資本の自己増殖の前提たる計算可能性の必要から手続主義が増殖して没人格界限の外が消えるのを危惧。

市場の外と没人格界限の外が「生活世界」。市場と没人格界限(行政)が「システム世界」。資本主義的市場と手続主義的行政は相補的。投資は社会の計算可能性を要求。手続主義は出世ゲームの前提たる税収増を要求。市場と行政から利益と便益を引き出すべく、人は進んで入替可能な没人格になる。かくて先の主客反転が生じます。

「生活世界がシステム世界を使う」から「システム世界が生活世界を使う」に反転。生活世界は「システム世界が許す範囲で、生活世界らしさとして消費されるもの」に縮む。人間関係の代わりに市場と行政を頼るほど、人間関係をコストだと感じ始める。気付くと孤独に陥って心身を病み、不安を埋める神経症的営みに淫します。

これを生活世界の不全と見て生活世界を回復する欧州。システム世界の不全と見てシステム世界を拡張する米国。後者は生活世界の擬態(メタバーズ)を含む。米国はアングロサクソンの伝統で家族は小戦闘集団。建国史ゆえに地域は共同体ならぬ組織集団。感情的安全が人より神に依存する宗教国家。ゆえに生活世界に執りづらい。

この対比は今も理念型として有効。でも四半世紀で欧州は米国に近づいた。若い世代ほど可処分時間をSNSとGAFAMのインフラ利用が占める。街や人間関係に依存しない分、コミュニケーションが文化的文脈から自由になる。今後は幼少期からますますこれらを使う。だからエートス(変わりにくい行為態度)は均質化されます。

国境を越えるコミュニケーションという時、「各々の国や地域の文化で育った人を前提に」バリアが低くなるとイメージしがち。愚昧です。ネット時間が増えるほど、「各々の国や地域の文化」が個人にエートスを刻む育ち上がりは消え、「生き物としての場所」に抱かれた生活形式も消える。お部屋時間が増えるだけでそうなります。

蓑原：近代化が進んでいる過程の中では、そういうことを無視してどんどん進んで来たんだけど、近代の終期において、今やヨーロッパでもそういう方向への反省が生まれている。私なんかの寡聞な、狭い勉強の範囲で言っても、例えば、ヨーロッパのあちこちで、都市計画でも、考える範囲が狭い小さい単位で、ネイバーフッドの議論とか、生活世界に近いところから考える流れが出てきている。アーバニズムの議論ですらそれが起こってるから、さっきのデンマークの例じゃないけど、やっぱり400m圏、15分圏という生活世界からの組み直しがどうしても出てくるわけですね。

そういう議論っていうのをもう一度しっかり組立て直した上で、アーバニズムを作ってい

なきゃいけない。でも、例えば一棟、数千戸もあるような分譲マンションなんていうのは、そんな住宅管理組合がうまく機能するわけがないし、建て替えることを考えると絶望的になる。しかし、資本の論理はその方が都合が良いから、売れるから、作っちゃう、そういうことになってますよね。

宮台：話したように、高層マンションの高階で、流産・死産率の上昇、鬱や認知症の劇症化、無刺激症での学力低下が生じている。安藤優子氏との動画で語ったら、タワマン居住者が「統計を出せ」と湧いたので「はい、どうぞ」と出したら一瞬で黙った(笑)。高層マンションの一人住まいは近隣関係がないので孤独死も頻発します。

こうした生活世界に生じた問題をシステム世界の拡張チャンスと捉えるのが米国。サーベイランス・モニタや、医療サービスや、マリオカートみたいな仮想空間 Zwiift でこぐエアロ・バイクを、押し込む好機だと捉える。生活世界の綻びを、資本の自己増殖が未だ及ばない市場外部として見出して、市場化し、安全・便利・快適を達成します。

生活世界の空洞化に対し、「システム化を制約して生活世界を回復する欧州の動き」と「システム化を拡張して生活世界を市場化する米国的動き」が綱引きします。テン年代半ばから歌舞伎町ホスト界隈に風俗労働と無縁な一般女性が入り出すけど、これも「生活世界での恋愛」と「システム世界での恋愛ごっこ」の綱引きです。

繰り返すと、日本はもとより、生活世界に固執してきた欧州すら、「生活世界を回復する動き」と「システム化を拡張する動き」の綱引きで、後者に軍配が挙がる流れ。マクロレベルの抗いは困難だから、国政改革などで力を無駄遣いせず、ミクロレベルの食・エネルギー・子育ての共同体自治に集中するのが、僕の「風の谷戦略」です。

連携が大切。食やエネルギーの共同体自治は別の運動体に任せ、僕と仲間は子育ての共同体自治を期し、年齢順に森のようちえん・森のキャンプ・恋愛ワークショップ・宗教ワークショップ・親病ワークショップをワンセットで供給する営みを始めた。スモールユニットの民主政を支える感情的能力を持つ成員を育てるルソー的営みです。

マクロをよく見て。ウヨ豚・糞フェミ・似非科学ヲタのクズ(言葉の自動機械・法の奴隷・損得マシン)が湧き、これら神経症患者を釣る感情の政治=ポピュリズムが民主政を覆う。皆の見込みの甘さを示そうと、ウヨ豚・糞フェミ・似非科学ヲタを SNS で釣っては叩く営みで、クズ発言に付く「いいね」の多さを「見える化」してきました。

これら「目に見えるクズ」とは別に「見えづらいクズ」も増殖中。近所の恵比寿周辺は、洒落たカフェやレストランがあり、駅から 50m でラブホ街。だからマッチングアプリで出会って 2 回目と覚しきカップルが多数出没します。男は凡庸な蘊蓄を垂れ、女が食い気味に首肯く。見ているこちらが恥ずかしい(笑)。

この後ラブホ。なのに恋愛感情を感じない。互いに許容範囲というシグナルの交わし合いのみ。これが僕が言うキャラ&テンプレ恋愛。ネット上の Q&A いわく「何回目でセックスすべき?」「2~3 回目」。バカか(笑)。でも、出会いを求める若者の 8 割にマッチングアプリ経験がある今は、これが標準。完全な属性主義です。

モテ系女子に印象的なデートを尋ねると全てお洒落デート。場所にワクワクしたのか人にワクワクしたのか不明。寝ても覚めても思う人と見慣れた道や公園を歩くだけで別世界。それが正しいデート。ちなみにステディがいる学生の割合は 25 年前の半分。でも盛られている。コクってイエスでカップル誕生。恋人関係とは言えない。

マッチングアプリの双方「いいね」でカップル誕生と、深く知らないのにコクってイエスでカップル誕生は、同一平面。キャラ&テンプレのお洒落デートのシメはラブホ。諸外国や僕が若い頃の日本は違う。長く一緒にいていつの間にか好きになっていちゃいちゃ。このお洒落デートの舞台を設計するのは建築家や都市計画家です。

野口：宮台先生、ありがとうございます（笑）

蓑原：今宮台さんが言ったこととのつなぎで言えばね、例えば、最近翻訳されたけど、『ソフトシティ』っていう本の中で著者のシムが提案している都市では、住宅は4階建てでウォークアップが限度だと言っていますよね。そうなると、さっき言ったように小さい単位で作っていったら、リブレイスもある速度と規模で行うことを考えなきゃダメだってことになる。都市計画でもこういうことをヨーロッパでは言い出されていて、そういう実践がもう進んでいるわけですね。そういう意味では、生活世界からもう一度立て直すという議論っていうのは、もう始まっていると思いますよ。

野口：はい、ありがとうございます。今日は都市計画家協会の催しなので、都市の話に引きつけて議論してみたいと思います。私は、今日お二人がお話いただいたことの処方箋として、“まち”を提案したいと思います。

なぜ“まち”を提案するのか？というのと、“まち”は私たちにとって世界だと感じられるからです。アフォーダンスという概念があります。シンプルに説明すると環境からもたらされる意味のことです。そのアフォーダンスがご専門の河野哲也先生から教わったことで「私たちは、およそ1mm以上1km未満くらいの範囲で環境からアフォードされている」ということがありました。逆にその外側のことは、私たちにはわかりません。つまり、私たちが確認できる関係性は、1mm以上1km未満の範囲に収まっているということです。私は、おそらく“まち”というのはこの範囲の中にあるのだらうと思っています。私たちが確認できる世界は、“まち”の中しかありません。つまり、“まち”は私たちにとって世界の参照先です。この世界が生きるに値するか？と問えるのは“まち”だけだといえるでしょう。今日語られてきた、私たちが尊厳を得るために必要な価値は、“まち”にこそ刻印されるべきなのではないでしょうか？

蓑原：ちょっと質問なんだけど、その時にね、今、そのフィジカルな空間について語っているんだけど、実はそれと同じようなウェイトで、あるいはそれ以上のウェイトで、そこにおける定着性とか、人間関係の密度とか、そういうものを同時に議論しないとダメなんじゃないですか。そこが最大の問題。

野口：全くおっしゃる通り。

宮台：森関連や恋愛・宗教のワークショップの目的は、1物理・身体的 physical な配置にアフォードされる身体的能力と、2相手へのなりきり role taking という感情的能力を上げること。双方に関連するのが、言語的に未規定なものを斥けずにワクワクする能力。総じて物理側の要素と人間側の要素は相補的。片側だけ考えられません。

建築家や都市計画家は、(1)場所のデザインに際して利用者の身体的・感情的能力のクオリフィケーション(資格審査)を要求し、(2)それを前提にそうした身体的・感情的能力を上昇させる育ち上げの場所をデザインすることを考えるべきです。ただし他者の身体の動きにアフォードされる能力は、感情的ななりきりの能力に前提を与えます。

「アフォーダンス」「なりきり」などの語彙は、皆さんが知る語彙と違うかも知れない。だから有効性を例示します。僕は虫捕り好きだから、娘2人息子1人の修学前から虫捕りさせた。でも就学後一年もすると、娘2人が「女の子だから虫は無理」と言い出し、息子は「ゲームで忙しいからパパ1人で行きなよ」と言い出す(笑)。

ところが、天体観測用の山荘の前にある虫だらけの牧草地に連れていくと、片っ端から虫を捕え始める。「おー、やっぱ虫捕り好きじゃん」「違うんだよパパ、体が勝手に動いちゃうの」。

これがアフォーダンス。認知・評価・指令という環境情報を情報処理している訳じゃない。環境にコールされて自動的にレスポンスするのです。

体が勝手に動く子供らが、僕が虫採りする姿を見ている時、僕の「身体のダイナミズム」を、子供らは易々と内側からシミュレート可能な筈。それゆえ、虫採りの営みで僕に生じている「感情のダイナミズム」に、子供らは易々となりきり可能な筈。身体次元のアフォーダンスと、感情次元のなりきりは、そんな関係にあるのですね。

絡み合う両能力は、相手の身体のダイナミズムを自らの身体のダイナミズムとして体験させ、相手の感情のダイナミズムを自らの感情のダイナミズムとして体験させて、不全感なき性交をも可能にする。AVを見て決めた達成課題をクリアして満足するが如き「二人オナニー」ならぬ、「一つのアメーバになる営み」を可能にします。

蓑原：今、宮台さんがおっしゃったことを、実は宮台さんの師匠筋になるのかな、見田宗介さんという人が、こういう表現で語ってるんですよ。僕はこれが我々にとっては非常に大事なことだと思うんで、ちょっと読み上げますとね、

「森や草原やコミュニケーションや都市の空間で、我々の身体が体験している、あの形状することができない泡立ちは、同種や異種のフェロモン、アロモンやカエロモンたち、視覚的、聴覚的なその等価物たちの力にさらされてあることの恍惚、他なるものたちの力の磁場に作用され、呼びかけられ、誘惑され、浸透されてあることの戦慄の如きものである。」

まさに我々の仕事ってというのは、そういう場所をどう作るかということになっていて、それが我々の役割だということですよ。

野口：全くそうです。素晴らしいと思います。先ほど蓑原さんが、そこに居る人の関係について考える必要性を説かれました。おそらくフィジカルなことも含めて、蓑原さんの言葉をお借りするならば、人の関係に“介入”しない限りまちづくりはできないんだと思います。ある場所における人の関係へ“介入”、そこで紡ぎ出されるフィジカルに呼びかけてくるまち、そしてまちがもたらす人の尊厳、こうしたことへの感受性を持っていることが、プランナーとして必要な資質なのではないかと思います。

宮台：僕の性愛論は、(a)いちゃいちゃ次元(言語以前の)、(b)関係性次元(言語的)、(c)社会的承認次元(規範的)を分ける。身体のアフォーダンスと感情のなりきりは「いちゃいちゃ次元」に関わり、御指摘の人を動機づける人間関係は「関係性次元」と「社会的承認次元」に関わる。建築も都市計画もそれら全てを射程に収めてほしい。

補足。宮台さんは何故そういう大人かと尋ねられる。言葉・法・損得への閉ざされを嫌い、コントロールよりフュージョンを好み、フェチよりもダイヴを好む性質のことでしょう。答え。外遊びで年齢・性別・家業などのカテゴリーを越えてフュージョンし、友達んちで御飯や風呂をいただいて親と交流した、幼少体験がベースです。

今とは違う外遊びです。夜中の高校に侵入して机の中のエロ本を探したり、立入禁止の池に侵入して魚採りをしたり、打上花火を横撃ちしたり、ブランコを立ち跳びしたり、空中回転して砂場に着地したり、雑木林で秘密基地を作ったり、ギャラリーを前に取っ組み合いで喧嘩したり。まさに「法より掟」「言語より言外」でした。

地域の大人たちが知らなかった訳じゃない。自分たちもやったからと見過ごしてくれた。そこにあるのは先述したパークの保守主義という共通感覚 common sense。共通感覚を越えて法を適用するお巡りさんもいなかった。80~90年代に全国のお祭り巡りをしたのも、80年代の新住民化=法の奴隷化の、外側を見たかったからです。

特に諏訪の御柱祭、岸和田のだんじり祭、紀州の四つの火祭。死亡を含めてよく事故がある。

でも祭時には平時とは違う安全と危険の物差しを使った。物差しは青年団や旦那衆にしか判らないと、お巡りさんが制服を貸与する所も。「地元のための祭りで、観光客は地元の人々の好意で見物が許されるだけ」のアナウンスも定番でした。

先日、秩父吉田の棕神社龍勢祭を見ました。アニメ『あの花の色を僕らは知らない』のモデル。昼日中に27の流派(家元)が秘伝のロケットを打ち上げる。1mに及ぶ筐体は打上花火というよりロケット。台風一過の強風下でも中止されない。あさつてに飛んで住宅地に着弾したり山火事になったりしたこともあるが中止されない。

平時と違う安全・危険の物差しが common sense で設定された祭りは今や殆どない。残った祭りも警察が「ソコに立つな・立ち止まるな」と過剰警備気味。それでも観光資源化を制約して地元で閉ざすことで維持されてきた。地元の人々が法生活で失う「力」を回復するのが本来の祭り。その本質をいつまで失わずにいられるかです。

僕は1959年に生まれてから90年代半ばまで、言葉・法・損得の時空ならぬ言外・法外・損得外の時空で呼吸してきた。90年代前半の渋谷・新宿などの援交やクラブを取材したのも、80年代新住民化で居場所をなくした子らの最後のアジールだったから。でも96年秋から街が冷え、そのせいで僕自身が居場所をなくして鬱化しました。

97年の酒鬼薔薇聖斗事件を契機に動機不明の凶悪少年犯罪が続発し、北須磨ニュータウンなど各地を取材します。「賃貸の子と遊んじゃダメ」「分譲価格帯2000万円以下の子とは遊んじゃダメ」とホザク親がマジでいた。そんなクズ親から子供を奪還したくて「専業主婦廃止論」を唱えた。それから四半世紀、状況は深刻化しました。

再びマヤ文明。気候・地政学要因で階級化が小さく、職業を交替し、高頻度で祝祭し、共通感覚を持続する。この分断回避をベースに威嚇ならぬ尊敬で統治した。死と生を循環する自然信仰の世界観をマヤ暦が支えた。観測技術と高度数学を使ったマヤ歴は、収量増加のみならず、「見よ」と指すと日食が始まる奇蹟の演出を支えた。

原生自然の間接化・をもたらず社会分化の抑止で二千年以上続いた。ウチらはどうか。ウヨ豚や糞フェミを待つ迄もない。男女で分断、世代で分断、国籍で分断されている。「ポチれば即日配達」を持ち出す迄もない。原生自然の間接化が極端化。生態系をモニターしないシステム世界(市場と行政)でポジション取りゲームを続けています。

人権を掲げた過剰コンプライアンスも所詮は利他ならぬ損得のゲーム。犯罪社会学の大斗・岩井弘融の60年代のヤクザへの参与観察。地回りヤクザの支援を得た宮台真司の90年代の援交調査。今なら大学の調査倫理委員会に申請すれば一瞬でボツ。日常のルーティンから見えないダークサイドを調査せずに、何が全体知だ、多様性だ。

野口： 宮台先生、大変素晴らしいまとめをありがとうございます。それでは、それをどんなふう to 実現できるのかを、少し考えてみたいと思います。本日語られたことの一つに、多様性や複雑性に関することがありました。魅力的なまちには、高低差があったり複雑に入り組んだ路地があったりします。これらは私たちの空間把握を混乱させ、先が見通せない世界を現出させます。そしてもう一つが、時間についてです。例えば、歴史的建造物のように変わらないものは、変わるものへの気づきをもたらします。また、自分が生まれる前の時間や死後に時間が継続することにも気づかせてくれます。そこに、計画に篡奪されない自由が同時にあることが、私たちに呼びかけてくるまちに必要なことのように思うんです。

宮台： 「多数の選択肢から、主体である自分が、制約なく選べるのが、自由だ」とする啓蒙思想からの思考は間違い。「物の動態や身体の動態にコールされて思わずレスポンスするアフォーダンスや、他者の凄さにコールされて思わず一挙手一投足を真似るミメシスこそが、真の自由だ」と、『14歳からの社会学』2007年から言っています。

ミメシスを模倣と訳すのは誤り。気が付くと模倣しているから「感染的模倣」が正しい。ペロポネソス戦争前の初期プラトンが賞揚し、この感覚をイエスが継承した。律法にあるから助ける利己的利他ならぬ、思わず助ける端的利他が正しい。90年代に教育論に応用した。競争動機や理解動機よりも感染動機が大切だと。

認知科学者の佐伯胖氏が競争動機より理解動機が大切だとしたのを批判する文脈。勝つ喜びが競争動機。分かる喜びが理解動機。でもギリシャが大切にしたのは感染動機。大学時代、廣松渉氏に感染して一挙手一投足を真似た。大学院時代、小室直樹氏に感染して一挙手一投足を真似た。感染動機の下で勝つ喜びや分かる喜びを享受した。

20年近く前、佐伯という名字の若い娘と恋に落ちた。結婚したいなと思って「お父さんはどんな人？」と尋ねた。認知科学の学者だと。認知科学者で佐伯...げっ(笑)。彼女の親族は大反対。でも彼女いわく「父に告げたら、もう決めたんだろ?って」。マジ感染した。佐伯先生やお弟子周辺では感染動機がキーワードになっています。

おあとがよろしいようで(笑)。真の自由は、多数の選択肢から好きに選ぶことじゃない。選択肢群を前に選ぶ「力」が湧かない時もある。それをプラグマティズムが指摘。「認識より関心」「知より力」つまり「内なる光」。思わず力が漲るのが、真の自由。力の受け渡しが、真の教育。力が湧く自分を頼む自己信頼が、真の尊厳。

ルドルフ・シュタイナーの3つの臨界期。力が湧く能力の習得が7歳まで。それをベースに、感覚素材に感動する能力の習得が14歳まで。それをベースに、ロゴスの理解や駆使を喜ぶ能力が21歳まで。年齢はともかく、順序が肝。最重要は第一臨界期。力が湧く能力なくして何事も始まらないと。時期的にプラグマティズムと被ります。

翻ってキャリコットが言う「場所の生き物としての全体性が与える尊厳」とは何か。先ほど「いいね」ボタンの「自己肯定感」ならぬ、揺るがない「自己価値観」だと話した。ならば揺るがない「自己価値観」とは何か。答えは「力が湧く自分を頼りにする自己信頼 self reliance」(ラルフ・ウォルド・エマソン)。またしても力。

機能としての空間 space で力を失い、生き物としての場所 place で力が湧く。それがキャリコットが言いたかったこと。力が湧くのが真の自由だから、空間は人を不自由にし、場所は自由する。性愛ワークショップに言寄せると、モテる存在は近くにいると力が湧き、モテない存在は近くにいると力を失う。ウヨ豚や糞フェミは?

友愛論やリーダーシップ論にも応用できます。3人の子供らに言ってきた。「細かいことを言う奴になるな」。細かい奴が力を失わせるのは自明。遊動段階の昔から一貫するゲノム的な二項図式が「力が湧く/力を失う」。定住以降、それを時空の性質として語る所から「聖=力が湧く/俗=力を失う」という聖俗二元論が生じました。

SNSで吠えるウヨ豚が職場ではフツー(余命3年ブログ問題)なのは、何故か。大学生がフェミニズムには関心はあれフェミニストと呼ばれるのを嫌う(宮台リサーチ)のは、何故か。答えは同じです。力を失わせる営みだと弁えているからです。力を失わせる営みが、僕が四半世紀繰り返し形容してきた「あさましく、さもしい」。

映画評では「力を失う」を「つまらない」、「力が湧く」を「ワクワクする・おもしろい」とパラフレーズしてきた。ひきこもり論では、社会に出られないのは「つまらない=力が出ない」からだと言ってきた。実際、ひきこもり(当初登校拒否)は、80年代の新住民化で社会が言外・法外・損得外を許さなくなって間もなく生じました。郊外と地方が言葉・法・損得へと閉ざされたので——法化社会 legalized society とする——96年まで大都市が居場所をなくした若者のアジールになった。でも80年代の法化社会でカテゴリーを越えたフュージョンを知らずに育った「育ちが悪い」小学生が成人した96年秋から、「微熱の街」が終り、力を失った僕は深刻に鬱化しました。

90年前後のバックパッカー時代、途上国の子の目がキラキラなのが不思議だった。今は分かる。言葉・法・損得の時空=法化社会に閉ざされず、力が湧く言外・法外・損得外の時空を生きること

ができからです。翻って、マッチングアプリの、双方向の「いいね=許容範囲」でカップル成立のショボさ。性愛までも言葉・法・損得に登録されました。

野口：ありがとうございます(笑)。私は「いろいろと比較検討した結果、あなたと結婚するのが最も合理的と判断した」というプロポーズはあり得ないと思っています。そんな時は「あなたに会った奇跡に一生を捧げます」というよく意味がわからないことを言ってしまいます。私たちは一生の中で最も重要な意思決定のときに、計画を排除しようとしています。なぜなら、自分の有限の一生が奇跡に満たされていると思いたいからです。しかし蓑原先生が嘆いておられるように、隅々まで計画され、計画によって全体が覆われているようなまちでは、社会の外側が見当たらなくなってしまい、生の奇跡を信じることができません。私たちは、根拠なく“偶然に期待できる”と感じられるときに、本当の自由を感じるんだと思います。そのようなまちを作ろうとすることこそが、まちづくりの本当の目的なのではないかと思いました。蓑原先生何かございますか。

蓑原：私がお渡しした紙にも書いてあるけど、我々の生活経験からいくと、まちってというのはやっぱりストリートがあって、そこに家並みがあって、その中にいろんな人がいて、僕なんかは桶屋の子どもとか自転車屋の子どもとかいろんな子どもと遊びながら暮らしていた。そういう構造があるんだけど、そういう構造が今、生活体験として持てない人が、実にコンビニで暮らしてる人たちが本当にまちがいいと思うんだらうかどうだらうかっていうのが根本的な疑問で、その辺をですね、認知科学の問題も絡むと思うけど、三丁目の夕日を経験したことがない人が、なぜ懐かしいと思うのか、それをどう理解したらいいのでしょうかね。

宮台：クオリア問題です。クオリアとは言葉で何を思い出せるかという体験質です。二十年前、学生が「先生の話が分かった」と言っても、何も分かっていないと感じられた。理由はクオリア問題。ある言葉で年長者が思い出せる体験に似たものを、若年者が思い出せない問題です。それで古い映画やドラマを見せる講義にしました。

論理化します。「御台場一丁目商店街」みたいな昭和40年代テーマパークがあるとするとその時代を生きた僕は、人間関係の息遣いを思い出しつつ物理環境を体験する。その時代を知らない子供はそれを思い出せず、与えられた物理環境をガチで昭和だと思う。蓑原先生が仰る「物理次元と人間関係次元の重ね合せ」の問題です。

建築家も都市計画家も映画監督も教員も体験デザイナー。体験デザイナーが「重ね合せギャップ」に鈍感だと、狙った体験を与えられない。若年者の「物や身体にアフォードされる能力」と「未規定な凄さを示す人にミメシスする能力」を適切に見積もらないと、年長者に生じる体験が、若年者に生じないことを見逃します。

体験デザインは、狙った体験を供給できたかを巡るフィージビリティ・スタディが不可欠。実行可能性調査と訳すけど、本質は「思い込みの排除」。説明します。90年代初期にプラグマティストのローティが多様性を巡る勘違いを指摘した。その多様性は、サラダボール(ゾーニング)か、メルティング・ポッド(フュージョン)かと。

いわく、多様な人種・宗教・国籍の人が権利侵害されずに生きるだけではダメ。「ゾーニング的多様性」であれば各主体からは「見たくないものは見えない」。だから小さな契機で疑心暗鬼が拡がって争い合う。これを避けるには、各主体の体験が多様性に開かれている「フュージョン的多様性」が不可欠。あなたの多様性はどっちか?

権利擁護だけならゾーニング的多様性で足りる。でも人々の「体験」が多様性に開かれていないから火種が残る。権利擁護の人権法を作って満足、ゾーニングに留まっていないか検証しないのが、文化左翼=やってる感リベラル。そうした頓馬が湧き続ければ、いずれ火種からバツ

クラッシュが生じる——彼の予測通りでした。

他のプラグマティストの例に漏れず、彼も初期ギリシャを参照する。だからアリストテレス『ニコマコス倫理学』の二項図式を弃えている。「罰が怖くて人を殺さない社会」と「良心ゆえに人を殺さない社会」。前者は、罰が与えられなくなれば人を殺す社会に逆戻り。イエスにも同じ図式があったけど、ローティの思考は古典的です。

見掛けの社会秩序ではなく、人々の体験に照準する必要がある。統治権力が巨大リソースを持てば、見掛けの秩序はアメとムチでどうにかなる。でも巨大リソースを持つ統治権力の持続可能性は不確実。ならば、統治権力の実力を頼るにせよ、「体験に照準しなくていい」ことにはならない。アリストテレスはそこまで考えています。

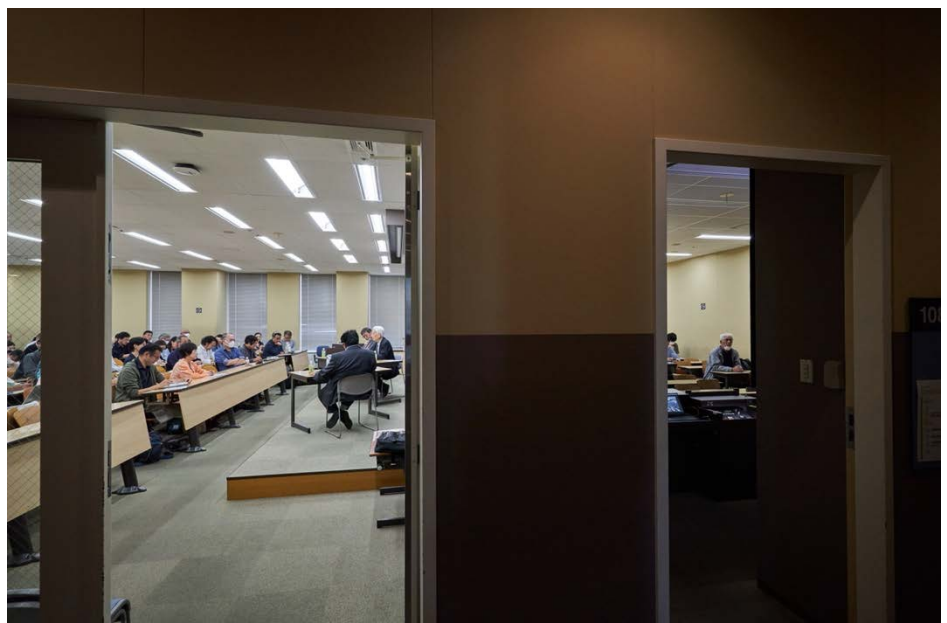
大災害を考えます。統治権力の行政(警察など)が機能しない時、これ幸いと略奪や強盗が横行するか。助け合いの災害ユートピア(レベッカ・ソルニット)が出現するか。「罰ゆえの秩序」なら略奪と強盗だ。「良心ゆえの秩序」ならば災害ユートピアだ。ちなみに日本でも程なく首都直下型地震か南海トラフ大地震が起こります。

生活形式が大きく違えば多少の棲み分けは要る。でも過剰な棲み分けは災害時などに疑心暗鬼を生むから、それなりの混ざり合いが要る。ローティの推奨は感情教育。カテゴリー(人種・宗教・国籍...)が違う子らが混然と遊んで仲間になっていれば、仲間の一人をカテゴリーで差別する輩に怒りが生じる。それが大切なのだと。

多様性の本質は、鳥の目から見て様々なカテゴリーの人がいることじゃない。人の目から様々なカテゴリーの人が混ざっているのが見えてワクワクする体験だ。ワクワクするのはボタニカルな廃墟と同じで、自分を越えた大きなものに抱かれた感じを体験するから。そんなワクワクを人に体験させるのが空間ならぬ場所でした。

人は静かすぎる場所で不安になる。多少ノイズがある場所で安心する。人は整頓されすぎた場所で不安になる。多少カオスな場所で安心する。長い森の生活によるゲノムの傾きです。ノイズやカオスなら何でもいいのではない。ノイズミュージックがそうだけど、良いノイズと悪いノイズがある。ただ事前の言語化は難しいです。

ならば、様々なノイズやカオスを体験させる実験をし、良いノイズやカオスと悪いノイズやカオスを多変量解析などで計量的に識別するといい。他方、ノイズ耐性やカオス耐性がない人は、些細なノイズやカオスでダメージを受ける。だから体験デザイナーはノイズやカオスを巡って「人の側」と「環境の側」の双方に働きかけるといい。



蓑原：今おっしゃったことってというのはね、本当に大事なことだと思うんで、我々はまちづくり論ってものを議論するときに、どうやったらそういう多様性の中で発生するノイズが、街としての雰囲気を作り出すかということを見ると、例えば団地の設計をして、住宅だけ並べちゃうっていうのは、やっぱりノイズがほとんど発生しない構造ですよ。

それで我々はたくさんの人と一緒にあって、幕張ベイタウンっていうのをこしらえる過程に
関与して、本当に麻布とか青山のような形で、下に店舗があって、上に住宅があるという形の街が、日本では成功しないもんだろかという実験を一生懸命やろうとしたんだけど、結果的には見事に期待ハズレに終わっている。建物としては一生懸命みんながデザイナーの人たちと一緒に頑張ってきたから、結構いい街並みになって、今もそれを守ろうという住民運動があるぐらい、住民は愛着を持っているんだけど、じゃあお店はどうなったかっていうと、最初入ってたようないいお店もみんないなくなっちゃって、あるいは追い出されちゃった。そういうような生活体験を持ってない人たちが、マンション購入者に多いし、管理するデベロッパー会社もノイズを嫌うものだから、そういうノイズを発生するような街の構造自体が壊されちゃうという結果になっちゃうわけですよ。そういう構造の中で、どうしたら本当に今おっしゃるような多様性というものを発生させることができるのかというのは、どう考えたらいいんでしょうかね。我々は少なくとも、かつての団地というのはいかにひどいと。やっぱりノイズを外したために、そういう形になっちゃってる。そりゃリアルではない。そうになっちゃうから、なんとかして昔のまちが持ってたような多様性とかノイズを発生させるようなものを作ろうと思っても、実際に設計という行為の中でやろうとしてもうまくいかない。

でも、しかしさっき言ったように、大丸有とかそういうところは、そういうことをなんとかして、フェイクでも何でもやろうとしてるから、それなりに面白いので集客力もあるし、場所としてのある種の面白さが成立している。

それに対して、一般市街地の中では、そういうものを作ろうという動機が、今の日本の都市計画の中ではほとんど存在しないわけですよ。ゾーニング型で専用型の方に行っちゃう方向に動いていて、そういうようなノイズが発生するようなまちをどう作ろうかという、哲学すらないのではないのでしょうか。

その問題に対して、どう考えたらいいんですか。しかも、特に若い人たちは、そういう生活経験がないから、ますます難しいかも。

宮台：教育の統計では、東大に入る子たちは、個室ではなく居間で勉強する割合の方が高い。社会心理学の統計では、知り合いが出す音は騒音として感じられにくく、見ず知らずが出す音は騒音だと感じられやすい。また僕は ADHD だから実感するけど、生体に多少負荷が掛かった状態ではないと「力」が出ないものです。

先ほど紹介したけど、窓が閉め切られて外界の音や風が遮断され、一年を通して温度と湿度が管理された高層マンションでは、子供の集中力や持続力や読解力が下がる。生体に多少の負荷が掛かった状態でないと「力」が出ないがゆえの無刺激症候群。予測的符号の外で「驚く」体験がいかに重要かを示しています。

子供時代にカテゴリーを越えてフュージョンした体験のない「育ちが悪い」新住民親は、子供に個室を与えて「静かで安全・便利・快適な環境で勉強に集中する」と考えるんだけど、バカすぎて笑える。集中どころか、エロ動画を見たり SNS でチャットしてるんだよ。自分の子供時代を振り返れば当たり前だろうが(笑)。

「育ちの悪い」新住民親が、住民民主主義で共同体自治に参加したら地獄だ。家庭も地域も「育ちの悪い」子を再生産しちゃう。現に、60年代の大規模団地による「育ちの悪い」子が、80年代に新住民親になって個室化&環境浄化による「育ちの悪い」子を育て、それらがテン年代に新・新住民親になって「育ちの悪い」子を育てている。

おぞましい。だから第一に、まちづくりでは「育ちの悪い」親の住民民主主義を排し、倫理的な地付き層が地元の倫理的な知識人を招いてプラットフォームを作ってからにする。第二に、「育ちの悪い」親が「育ちの悪い」子を再生産する悪循環に抗うべく、子を親から引き離し、「カテゴリーを越えたフュージョン体験」を与える。

共に「民主政の民主政以前的な前提=感情能力」の再構築によって民主政が集合知で適切な決定を出力できるようにする営みです。また、第二の、森の体験などを与える子供向けセッションでは、帰宅した子が、「育ちの悪い」親に再汚染されないように、子の体験セッションと同時に、親の体験セッションもすることが不可欠です。

母校の麻布の講演でも、子と親と一緒に参加するよう求めてきた。親の「育ちの悪さ」を親の面前で子に伝え、子が親の言うことを真に受けないようにさせるためです。大きな絵を念頭に置きつつも、細部が果たす機能を漏らさず観察する。こうして人が身体的・感情的に劣化した状態から離脱できてやっとな共同体自治が可能になります。

野口：ありがとうございます。そろそろ終わりにしようと思いましたが、ノイズという大変重要な概念が出てきました。ノイズミュージックの素晴らしさは、音楽の法則を一切満たさないにもかかわらず、いや満たさないからこそ、美しいと感じられる瞬間が訪れるところにあります。それは、意味を与えてくれない世界が、ふとした瞬間に見せる表情に、私達が感動に打ち震えることに似ます。ノイズの存在は、世界がデタラメだからこそ美しいということへの気づきを与えてくれます。

それでは、そのノイズをどうやってまちに実装すれば良いのでしょうか？おそらくその一つは、正しさより、体感できる好きを優先するっていうことなのだと思います。そしてもう一つが、宮台先生から教わった、非合理性のためには徹底的に合理的にです。非合理的なノイズの実現のためには、合理的なテクノロジーさえも徹底的に使い尽くすのです。

蓑原：ちょっと一つだけ留保をつけたいのは、あらゆる近代化の資源を使うというときに、今一番流行っているのはさっきのアルゴリズムですよ。未来を読めちゃうというような近代化が、だから、デジタルによる未来予測みたいなことを信用するような方向に向かっていっていかばいほど、今宮台さんがおっしゃっている方向とは違う方向に行っちゃうということ意識しないと、近代化を尽くすということの意味は、近代化を超えるということと合わせて考えないといけない。

宮台：そう。「言外に敏感であれ」というのも言葉。言葉にならないものを言葉でピン止めする必要がある。さもないと言葉にならないものを継承できず、文脈が変わった途端に忘却される。イチチャイチャ次元として身体に関わるアフオーダンスと感情に関わるミメーシスを言挙げするのも、言外に反応する能力の継承を目指すから。

ウェーバーは近代の合理性を計算可能性だとした。ならば計算不可能なものは非合理的か。あり得ない。生存確率増大の如き目標に貢献すれば、計算不可能性も機能的に合理的。計算不可能なものの合理性も計算可能。サイエンスは、狭義の近代が排除してきた前近代的なものの合理性を、十分に擁護できます。

無刺激症候群に戻ると、予測符号化理論によれば、十全な認知を省いた、徴候だけの捕食・逃亡が生存確率を上げた。素朴な論者は、予測的符号の外で起きた期待外れへの驚きを生体に否定的に捉える。ヒトの言語的予測符号化では、未規定性への驚きが生体に負荷を掛けて生体を活性化する。これも計算不可能なものの合理性。

僕の語彙で言えば、全てが安全・便利・快適なら、ヒトは危険への対処能力を失い、生体が劣化する。キャラ&テンプレで、全コミュニケーションがトラブルフリーなら、相手の予想外の

反応に適切に反応する能力を失う。だから、頓馬な新住民親のノートラブル至上主義が、子の身体的・感情的劣化をもたらすことになります。

身体的・感情的劣化を被ったウヨ豚や糞フェミのクズ(=言葉の自動機械・法の奴隷・損得マシン)が民主政を篡奪するくらいなら、良きデータセットからディープラーニングさせた生成AIに、決定を委ねた方がマシです。「その意味で」レイ・カーツワイルは正しい。そこで思い出すのがJ・G・バラードの1960年代のSF作品群。

初期ギリシャは、経済活動を奴隷が担い、政治・文化活動を市民が担った。それに似て、経済・政治活動をAIが担い、市民は文化活動のみ担う。初期作品では文化活動が芸術を意味したのが(『ヴァーミリオンサンズ』シリーズ)、晩期作品では多型倒錯的な錯乱を意味するようになります(『クラッシュ』『ハイライズ』)。

理性・知性的という意味で合理的思考をAIが担うので、ヒトは合理的思考を免除され、アニミスティックでブルータルな原初の行動形式に戻る。その方が「力」が湧くから。ハイデガーによると技術とは負担免除。負担免除のために理性・知性を使って技術を開発してきた。そしていよいよ最後の負担免除が理性・知性の負担免除だと。

テックの真の目的はヒトを理不尽や不条理に開くことだとしたのはマルクーゼ。AIが合理的ならヒトは非合理でいい。AIが仕事をするならヒトは遊べ。遊びは滅茶苦茶な程いい。野口さんや僕が偏愛するノイズ・ミュージックもそれ。養原さんとの初回対談は、ノイズ・ミュージシャン「メルツバウ」ライブとのジョイントでした。

野口：ありがとうございます。そろそろ終わりにしようと思いますが、何か付け加えることはございますか？大変充実した議論になったのではないかと思います。まちづくりにとって重要なこととは、私たちに尊厳をもたらしてくれる非合理的な価値を、場所に刻印していくことなんだと思います。そしてそのためには、合理性の力も徹底的に使い尽くす。ただし、そのアルゴリズムに絡めとられて、結果的に尊厳を手放してしまわないように、私たちは常に気をつけていく必要があります。それでは高鍋さん、これで終わりでよろしいでしょうか？はい、どうも皆さんありがとうございました。

(拍手)



全国まちづくり会議 in 東京ちよだ オープニングセッション

『まちづくりの哲学』

2023.10.7 13:15~15:00 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー1083

宮台	真司	社会学者／東京都立大学教授
蓑原	敬	都市プランナー／蓑原計画事務所所長
野口	浩平	代官山ステキな街づくり協議会

主催：認定NPO 法人日本都市計画家協会

写真：石川望

オープニングセッション「まちづくりの哲学」

高鍋 剛

JSURP 副会長／株式会社都市環境研究所

1. 企画の背景

全国まちづくり会議2023のテーマは「これからのまちづくりの担い手」であるが、その意味はこれからの都市計画・まちづくりの担い手は益々多様化することを予測してのものであり、JSURPが30周年を迎える節目としてもふさわしいものと考えたものだ。しかし、その担い手達が活躍する現在の都市、地域、社会は今どの様になっているのか。人口減少や空洞化などの目に見える問題だけではなく、もっと根本的な問題を抱えているのではないのか。

そのような問題意識から、今回のオープニングセッションでは、ベテラン都市プランナーの蓑原敬氏、気鋭の社会学者の宮台真司氏、コーディネーターには長年二人の対談を企画してきた野口浩平氏の3氏をお招きし、「まちづくりの哲学」と題して開催することになった。このタイトルは代官山ステキな街づくり協議会が2011年に開催した連続セミナーのタイトルであり、蓑原氏、宮台氏が2016年に出版された本のタイトルでもある。お二人はこの12年間何度も対談をされ、このテーマについて論じ合ってこられた。一言で言えば「よいまちとは何か?」ということについて幅広い学問分野の知見を元に探求してこられたのである。

セッションを企画するにあたり、僭越ながら私から以下のようなテーマ(論点)をなげかけてみた。

1. 社会が急速に変容してきた中で、今リアルなまち、まちづくりが重要な理由は何か。
2. ローカルな地域主体のまちづくりと、俯瞰的に考える都市計画との連動はいかにあるべきか。
3. そのような中で我々プランナーやまちづくりを先導していこうとする者(行政も含めて)の役割は何か。

このテーマを、登壇の3人に受け止めて頂き、しかも蓑原氏からは事前にこのテーマについての基本的な認識として11ページにわたるメモを作成して頂き、当日は会場参加者に配布した上でセッションが進むことになった。なお、本セッションについては、宮台氏からの提案により記録が公開されることとなり、先述の蓑原氏のメモも合わせて記録集として協会HPにて公開されているので、詳しくはそちらをお読み頂きたい。

2. 都市計画とリアルなまち

今回のセッションは、「まちづくりは僕らを幸せに

するはずのものだったが、それとはほど遠いものとなっている」という宮台の問題提起から始まった。そしてこの問題は都市計画の枠の中で考えても解のない問題であり、人類学、宗教学、認知考古学等の横断的で知見が必要であると言う。

蓑原は、我が国の近代都市計画(アーバニズム)の成果は認めた上で、出来上がったまちがリアルなのかどうかは疑問であり、その際物理的なリアルさ、心理的なリアルさをどう考えるかが問題だとした。また、アーバニズムは本来縦割りの世界ではなく、俯瞰的に物事を捉え、専門分野を横断的に繋ぎ、行政・民間・市民が一体となったプロセスで行うべきものがそう出来ていないと言う。俯瞰性の問題については、以前の森ビルのお話を例に出し、社会に貢献するためのデベロップメントという発想があったこと、そのような発想が今行政やアカデミズムに欠けており、仕方なく民間に委ねている状態になっていないかとした。

また、「リアルなまち」とは何かについてはこのセッション全体を通じて議論が展開していくのだが、人がそこに居て「幸せ」や「尊厳」を感じることができるか、と言う問題が核心の1つのようなのだ。そしてこの「リアル」とは何かという問題は、今回のセッションで我々に投げ返された宿題でもあったのではないかと考えている。

3. 人の尊厳(幸せ)とまちの関係

宮台は80年代以降、団地化、郊外化、コンビニ化、SNS化する過程の中で人の「感情的劣化」が進み、その結果民主制が成立しなくなったと言う。民主制が機能する前提は「感情的豊かさ」であり、つまり「自分はこの決定で良いが、あの人やこの人はどうなるのかと想像し懸念すること」(ピティエ)であるという。また、人が「入替可能な存在」であると認識されると孤独を感じさらに感情が劣化していく。それが増えると民主制はさらに成立しなくなるが、その原因にまちづくりの失敗があるという。

蓑原はもともと民主制は戦後いきなり与えられたものであること、その背景から自らの意思で環境を直したり意思決定するという経験がなかったことから、西欧型の個人の主体性をベースにした民主主義が実現できるのかが不明であるとした。またそもそも人間に

尊厳があったわけではなく、しかしそれでもこの文明、都市をいかに持続させていくのかを考えるのが人間であり、その鍵の1つがアーバニズム(都市計画とまちづくり)ではないかとした。

尊厳の問題は、死生観、時間、場所、自然とも深い関係がある。宮台は、人間は死(予測不可能なこと)を意識することで力を奪われない、廃墟やバラック、自然のような人間の時間を超える空間に抱かれることで安心すると言う。そして、この思考を元にするると、「ヒトの尊厳を支える街=フェイクならぬリアルな街」が何かは自明であり、「ヒトはルーティンの外に出て社会に抱かれていると感じると、力を回復してワクワクし、神経症的反復強迫を脱して感情的安定を得る」とし、アジア人の多くが計画都市に劣等感を抱くが、計画性ならぬ自生性のあるまちが実は重要であるとした。またそのような視座の欠如、資本主義の素朴な理解が原因で都市計画家が劣化していったと結論した。

4. これからのアーバニズムに向けて

では、これからのアーバニズムのあり方をどう考えたら良いのだろうか。宮台はフィールドワークを重視する社会学者であり、蓑原は、アーバニズムの現場体験を重視するプランナーである。2人のこれまでの経験、実践からいくつかのキーワードが出てきた。

①巨大開発からネイバーフッドの保全と再生へ

蓑原は都市の持続性の問題から、巨大開発からネイバーフッドへのシフト、15分都市圏などの歩ける計画単位の重要性についてコペンハーゲンの例を挙げながら説明した。海外の都市計画がこのようにシフトしているのに対し、日本は未だ民間大資本による開発に依存し、市民がこのようなアーバニズムのプロセスに巻き込まれていないことを問題視した。そしてこの視点がリアルな街を実現するためには重要であるという。

②フュージョン、体験デザイン、アフォーダンス

宮台も蓑原も幼少期に、親の職業の違う多様な「人種」との交流を経験しており、カテゴリーを超えて人間同士が相互に介入することを宮台は「フュージョン」と言う。よいまちを考えるためには、人間個人が多様性を受け入れ、相互に介入できる感情的な能力を持っている必要があり、そのための性愛ワークショップ(体験デザイン)を継続しているという。つまり人間の身

体、感情能力の引き出しが重要なのである。また、「アフォーダンス-ヒトが環境にコールされて自動的にレスポンスする能力-」の概念も重要で、都市計画家は、(1)場所のデザインに際して利用者の身体的・感情的能力のクオリフィケーション(資格審査)を要求し、(2)それを前提にそうした身体的・感情的能力を上昇させる育ち上げの場所をデザインすること、を考えるべきだとした。

③生活世界とシステム世界、ノイズと計画

高度に社会システムが発展する世の中では、没人格境界である「システム世界」が没人格境界の外である「生活世界」を使う形になってしまう。人は市場と行政から便益を引き出すために進んで入替可能な没人格になる。その結果、気づくと孤独に陥って心身を病み、不安を埋める神経症的営みに淫すると宮台は言う。

蓑原は、このような生活社会のあり方を考えるネイバーフッドの議論の流れが出てきているという。つまり住宅も高層化せず、一定の速度でリプレースも行う前提でのアーバニズムだ。

生活世界の問題を考える際に、ノイズというキーワードも示された。宮台は言う。人は多少ノイズがあるところで安心する。これは先の廃墟(カオス)の議論とも接続する話だ。そして人が一定の「ノイズ耐性」を持っていることも大事だという。また蓑原も、幕張ベイタウンの事例を示しながら、計画の中にこのような多様性やノイズを挿入していくことの難しさと哲学の必要性について述べた。

とても全ては紹介しきれないので詳しくは記録集をご覧頂きたいが、今回のセッションについて、最後の野口の言葉を締めくくりとして紹介して終わりたい。

「まちづくりにとって重要なこととは、私たちに尊厳をもたらしてくれる非合理的な価値を、場所に刻印していくことなんだと思います。そしてそのためには、合理性の力も徹底的に使い尽くす。ただし、そのアルゴリズムに絡めとられて、結果的に尊厳を手放してしまわないように、私たちは常に気をつけていく必要があります。」

『まちづくりの哲学』を無事終えて

—これから我々が考えるべきことは何か—

2024. 1. 1 高鍋剛

1. 「まちづくりの哲学」セッション開催の背景

全国まちづくり会議で開催したこのセッションは、予想以上に多くの人に会場で聞いてもらい、しかも正確な記録集を残し、公開することができた。二人の対談をずっと企画してきた野口氏は、このセッションがどのように受け止められているのかが気になるようで、ひとまず自分自身のことを少し振り返ってみたい。

そもそも宮台氏の本も蓑原氏の本も以前から読んでおり、各氏がどのような考えをお持ちかはだまかには知っていたが、二人が対談をすることになろうとは想像もしていなかった。それが2012年の衝撃だった。しかし今になって考えてみれば、都市計画と社会学の専門家が意見を交わすのは本来当たり前であって、これまでそのような機会がなかったこと自体がおかしいのだ。学術の世界で言えば、都市計画も社会学もおそらく閉じた中で議論が展開されているということが背景にあるだろう。そのため、双方に対談をする、意見交換をするという動機が生まれない。

ところで妻は昔からの宮台ファンで、家には宮台本が数多くあり、その影響で宮台氏の本を私も読み始めた。最初に関心を惹かれたのは、90年代のテレクラ、援交問題だ。「テレクラで約束した男女が待ち合わせするのは、有名建築家の建てた建築の前だ。何故か。そこが最もその地域で地域性を欠く場所になっているからだ。」なるほど、と思ったものだ。まちづくりの現場に社会学の知見が関連付けられた瞬間だった。これからは社会学の勉強もしないといけないなと思い、社会学の本を探してみたが、どうもピンとくるものがない。そんな経緯で社会学全般に接近していくことはなかったわけだ。

そんな経緯もあって2012年のセッションは妻と共に代官山に行った。この時のセッションの話は実はちゃんと覚えていないのだが、蓑原氏が数々の質問を宮台氏にぶつけ、それに宮台氏が次々と答えていくという形だった。まだこの時は対談と言うよりも若干インタビューに近い印象があって、お互いの関心分野、思考を確認し合っている感じもあった。ちゃんとメモを取っておくのだったなと後々思ったが、当時ツイッターで宮台氏のコメントを小刻みにツイートしていたら、宮台氏本人が全てリツイートしていて、「マメにエゴサーチしておられるなあ」と思ったものだ。

中でも印象的だったのは森の話だ。つまり小さい頃に森を歩く、自然の畏怖を感じるという話。こういう経験を経て人間の感情が形成されるという話だ。蓑原氏も宮台氏も、当時のセッションでもそれぞれの幼少期の話をされていたと思うが、30歳以上年齢の違う2人がある種共通する都市体験を有しているという話で、この経験と記憶が、専門分野と立場の違う2人の議論の起点にもなっただろうし、土台にもなっていると感ずるのである。そしてこの話は、2023年の全まちセッションにおける「リアルなまちとは何か？」という議論に接続する。

ところで「リアルなまち」は今回のセッションで私が投げた問いの1つなのだが、実は蓑原氏が私の意図を「深読み」してくれて議論が深まったものである。2021年の代官山のセッションでは、宮台氏が「バ美肉」の話などを引き合いに出しながら、いかに多くの人が現実のまち＝リアルなまちに関

心を失っているか、逃避しているかという話が展開された。その結果、まちづくりという行為が人を場所に紐付け、人間関係を再構築する、結果として人間自体も快復させる手段になり得、またそれを進めるための建築家、都市計画家は知的階層と一般の人々を繋げる「ミドル」として仕事すべきという議論の展開だった。この話は非常に分かりやすく、しかし一方でまちづくりの現場で仕事をしているプランナー達はこういう話を知っているだろうか？とふと疑問が生じる。いや、多分知らない。というわけだ。つまり私の考えた「リアル」とは現実のまちという程度でしかなかったのだが、蓑原氏が深読みしてくれたという訳である。こういう時、インテリは頼もしいと思う。

いずれ全まち会議に二人と野口さんを招きたいという考えは結構前から頭にあったと思うが、2021年のセッションでそれが本気に、よりリアルなものとなった。当時協会の中で既に副会長の立場に変わっていたことも背景になろう。そのような経緯の中、2023年の全まち会議は東京・明治大学で開催することが決まった。そして、コロナも収束してきた。しかし、2022年冬、宮台氏襲撃事件が発生する。ここで私の中では半分諦めることとなったわけだ。いつ実現するかなあと。

しかしながらその後宮台氏は驚異的な快復速度で現場に復帰した。4月段階で蓑原氏にこの対談を打診してみたところOKであり野口氏を通じて宮台氏にも打診、実現に至ることとなる。

2. 蓑原メモーリアルなまち、俯瞰性、ローカル

このセッションを行うにあたり、個人的な思いを3人にぶつけてみた。こんな議論を期待するというテーマ設定だ。これがそのまま採用されなくても結構という思いだったが、3人には快く受け入れて頂いたようだった。

1. 社会が急速に変容してきた中で、今リアルなまち、まちづくりが重要な理由は何か。
2. ローカルな地域主体のまちづくりと、俯瞰的に考える都市計画との連動はいかにあるべきか。
3. そのような中で我々プランナーやまちづくりを先導していこうとする者（行政も含めて）の役割は何か。

この問いに対し、蓑原氏からは全11ページの論文を事前にお送り頂いた。曰く、「抽象的になりがちな我々の議論を、全まち会議の場で現場に落としこむ議論にするため」という趣旨でとのことだったが、2時間という限られた時間での議論を大幅に補足頂く貴重な資料であった。

蓑原氏はこのメモの中でまず「リアルなまち」問題を掘り下げる。背景としての人新世問題、自身の幼少期のまち体験についても言及しながら、まずリアルなまち問題を考える視点の1つが「関係性」であることを明示する。

“その風土のほとんどの部分は、すでにヒトの手が入っていて、その介入の最も先端的な部分がまちであり都市であり広域圏（リージョン）、国土として存在し、動いています。この風土に介入し、部分的に管理し、変化させているのはヒトですが、誰が、何がアクターとして具体的にどう介入しているのか、その介入にヒトとヒト、ヒトとモノがどう繋がり、どういう関係性を持って繋がっているのか。”

そして、リアルなまちとは Fake(まがいもの) との対比で考えると、そこで商売を営む家業型の商売が成立し、人と人との対面による繋がりがあることが重要であること、このことがまちをまちたら

しめている重要な要因になっていることを指摘している。そしてこのリアルなまち問題については、セッション中に宮台氏が明確な答えを示す。

“美学者の廃墟論やキャリコットの人類学的思考の教養があれば「ヒトの尊厳を支える街=フェイクならぬリアルな街」が何なのかは自明です。ヒトはルーティンの外に出て世界に抱かれていると感じると、力を回復してワクワクし、神経症的反復強迫を脱して感情的安全を得ます。これは進化生物学的に達成されたゲノムの傾きです。”

このセッションにより、リアルなまち問題の根本は「人間の尊厳」であることが明確になる。そう考えると近代の都市計画、とりわけ土地区画整理事業や市街地再開発事業などの基盤整備手法は、一方で日本の都市の発展近代化を支えたが、リアルなまち問題に対して逆の効果を持っていたといえる。それは後半の幕張ベイタウン問題にも繋がるが、人と人との関係を構築できるような「商売」の成立、予測不可能性を設計することの限界などの技術と関連するだろう。

もう1点、このメモの重要な点は「俯瞰的に考えるアーバニズム」だろう。俯瞰的という時に色々な意味があると思うがまずはエリア的な俯瞰性の話が展開される。

“田園と境目なく展開している日本の、自然豊かで美しい広域都市圏では「まち」と田園を分離するのではなく、これを一体として考え、拠点・ネットワークのアーバンな世界を創る。その拠点が伝統的に存在していた「まち」の近代化版になれば良いという願いが込められていました。”

この広域計画の考え方はセッション中では日本の自然観、自然特性の話としても展開したのだが、制度的に言えば日本の都市計画の仕組みの最大の弱点であるとも言える。つまり都市と田園の全体のビジョンを描き、包括的に規制誘導できない仕組みである。韓国はその問題に気がつき、あつと言う間に制度化する。そして今ではGISで包括的な国土データを活用できるデータ環境を整備してしまった。

早稲田大学名誉教授で地理学専門の宮口侗迪は、長年農村と過疎地域を研究してきたが、過疎地域からの目線で広域圏にある都市の重要性を語っている。つまり日常生活と地域の運営は、過疎地域・農村地域が長年培ってきた共同性とその仕組みで持続が出来るが、モノは文化の供給の場としての拠点都市が必要不可欠であること、そういう意味での広域概念が必要としている。また、農村地域・過疎地域は、最小限の人数で国土を効率的に管理する仕組みとなっており、日本の農村地域の発展は手法として一見画一的であったものの、結果的に広大な自然環境を保全することに寄与していると。

俯瞰性についてもう1つの問題提起があった。これは分野横断的な俯瞰性である。これは行政としての推進体制の問題でもあり、専門家・アカデミアの分野横断性の問題でもある。分野横断的な俯瞰性こそがアーバニズムの本質であると。

さらにもう1点注目したいのは「ローカル」の概念だ。

“ヨーロッパのまちは明らかに自治都市で、地域主体と言えそうなアーバニズムの結晶です。ヴェニス人は自分をイタリア人であるよりはヴェニス人だと思っている。「まち」の人間関係を維持し、まがい物でない「まち」の空間の文脈を維持継承しようとし続けています。”

ローカルな地域主体のまちづくりを考える時に、アイデンティティとしての「ローカル」をいかに構築するか、それをベースにいかにまちづくりを進めるかという話であろう。これに関連して、自治体と住民との距離感の問題や、分権以降も続く中央集権的な体制の問題が指摘される。

実際私のまちづくりの現場でもこの問題は常について回る。特に影響が大きいと感じるのは市町村合併だ。中でも最後の平成の大合併ではとても市民が1つのアイデンティティを共有できない単位になってしまった自治体が多く出現し、非常に象徴的なのは、地域性を失った自治体名が多く誕生したことだろう。従って、現在でも旧町村単位のアイデンティティをベースにまちづくり考えるチャレンジが続いており、この事が近代の行政運営上の「公平問題」につねに晒され、コンサバな行政運営指針を選出した自治体はじりじりと後退していく状況に追い込まれている。実際近年ユニークなまちづくりを展開している自治体の多くは、この合併問題を逃れ、アイデンティティを失わなかった所である。北海道東川町の事例や過疎地域における住民自治の取組などが頭に思い浮かぶ。

このように蓑原メモは、リアルなまち、俯瞰性、ローカルという3つの重要な概念を指摘したメモであった。

3. 街が眼前に立ち上がる瞬間-リアルなまち問題

宮台氏のエピソードの中で印象に残っていることがある。それはマル激オンデマンド (video news.com/神保哲生氏主催) での会話だ。正確ではないが大体以下のような会話だった。

神保：宮台さんは学会ではどんな位置づけなんですか？

宮台：つまはじき者ですよ (笑)

神保：でも学会には行くんですね？

宮台：行きますよ。でも最初だけ出てすぐに街に出ます。そこで女性をナンパして色々話を聞くわけですよ。そうするとね、目の前にその街がぶわーっと立ち上がって来るわけです。

この話がとても気に入っていてよく思い出す。この後のやりとりで、学者が社会を分析する上でデータも大事ではあるが、フィールドワークを通じてしか分からないことがあるということと言われていたと記憶している。

さて、「街が立ち上がる」とはどういうことかと最近よく考える。小説家、奥田英朗の小説に『純平考え直せ』(2013/光文社) という作品がある。舞台は新宿歌舞伎町、19歳のヤクザの子分、純平が主人公だ。純平はとても「良い奴」なので街の皆に可愛がられるのだが、ある日親分に銃を持たされ暗殺を命令される。純平は迷うのだが、周りの人間達にも引き留められる。「純平、考え直せ」と。そして、この小説では純平の表情、周り人達の表情に加えて、歌舞伎町という街が見事に「立ち上がって」くる。しかも歌舞伎町の重層性と色彩を実感できるような立体的な立ち上がり方だ。私が歌舞伎町の街の空間を知っていることも大きいとは思いますが、読み進むにつれ危ない街歌舞伎町が非常に魅力的な街にも見えてくるわけだ。作家、奥田英朗の力量の問題でもあるが、立ち上がる経験をしているかどうかは非常に重要な問題だ。

セッションではリアルでない街として渋谷が引き合いに出された。考えて見ると今の渋谷は歌舞伎町のように小説の舞台になりにくいと直感的に思う。渋谷がメディアに出てくるのは主にスクランブル交差点で、例えばNetflixオリジナルドラマで話題になった『今際の国のアリス』(2022/Netflix)。スクランブル交差点で謎の光を浴びた主人公達と街の人は一気に「今際の国」に飛ばされる。そこで

展開される生死をかけた「ゲーム」の舞台は、廃墟になった渋谷の街なわけだが、宮台氏の発言の通り廃墟になった渋谷の画は、ある種の強烈な魅力を放っていた。

街が立ち上がるとは、おそらくそこに住む人間を通して街の実像が見えるということ、あるいはそういう体験ということだろう。プランナーとして我々が考えるべき事の1つは、このように街を見ているかどうかにある。つまりデータだけでなく、社会学的な視点、文学的視点で見ることができるかどうか、など。そしてその街がリアルな街かどうかはそういう視点を通じて判断されるということになる。この基礎的なサーベイと分析手法についても色々課題がありそうである。

4. 計画と非計画

25年ぶりに釜山を訪れた。前回の訪問の記憶はやや薄れかけていたが、韓国第二の巨大として発展を遂げたのは間違いない。釜山に来て思うのは、国際市場に代表されるドメスティックな古い街と、高層マンション群、オフィス群が林立する近代都市計画の手法を象徴する風景のコントラストだ。釜山が急速に拡大した契機になったのは朝鮮戦争である。つまり1950年頃。戦難を逃れた人々が一気に流入したので、谷間には密集した無計画な集落が多数形成された。国際市場もその当時に闇市から始まって形成された市場で、その後他の市場も繋がって生活と商売に必要なものはほぼ全て揃う総合的な市場として発展し、今なお健在である。そして山の麓と海沿いの埋め立て地には高層のマンションアが並ぶ。都心部の平地を高密度にせず、郊外の山麓や沿岸部を高層化しているという点で都市計画の密度コントロールのセオリーが適用されているとは考えにくい。この背景には、まず韓国の近代の住宅文化がマンション（韓国ではアパートと表現）であることや、人口流入のスピード、都心の密集市街地の複雑な社会問題などがあると考えられるが、一方で韓国の市場文化を守るという思想もあったのではないかと思える。自分の写真の被写体になるのは、結果的にこのような古い街が中心になっていたのだが、街のアイデンティティを保全するという意識は日本よりもかなり高いのではないかと感じる。眺望点から写真を撮影した際に、風景として美しいかどうかはまた別の問題ではあるが。

ところで計画と非計画という話は昔から話題になるテーマだが、このセッションでは後半に「ノイズ」の問題として取り上げられた。つまり計画的に整備された街で人はワクワクしない。予測可能なものにはワクワクしない。街に呼びかけられる（アフォードされる）こともない。この先に何があるのかな？という好奇心を沸かせる場所、期待を裏切る（上回る）展開、ある種の危険な香り、様々なノイズが大事だという話だ。そしてそれをあらかじめ計画できるかというとなかなか難しい。

以前横浜都心部のアーバデザイン指針を検討した際にも近い議論があった。その際に議論の1つになったのは中華街の扱いであり、中華街があつた集積と多様性、雑多性、街としての魅力を放っているのは、計画的に誘導された結果ではないこと、また今後もそうすべきではないだろうこと、などである。実は中華街には地区計画がかけられているのであるが、それ以上のデザイン的な介入はすべきではないとの結論に達したと記憶している。

現実問題として都市の市街地全てを計画することは困難である。しかしながら、都市のアイデンティティの問題と、この計画—非計画の問題は深く関連しており、その都市の「リアル」を形成また育成、保全するために近代都市計画の手法を導入すべきかどうかは十分吟味すべきであろう。おそらく多くの都市において、その都市のアイデンティティが形成されてきた地域には長く、深い明暗の歴史があり、1世代の発想と技術ではなしえないものがあるからだ。

5. 人を幸せにする都市、まちづくり

今回のセッション、冒頭に宮台氏が蓑原メモを踏まえ、蓑原氏の思いを代弁する形で以下の発言をすることからスタートした。

“曰く、元々ひらがなの「まちづくり」は、僕らを幸せにするはずのものだったのに、今の都市計画は——ここで僕は渋谷を今思い浮かべますが——人々を幸せにするものから程遠いものになったのだと。”

このセッションのテーマはこの一言に集約されていると言ってもいい。そして、人が幸せになる都市の対極に、「安全・便利・快適な都市」があるという。まさに近代都市計画と近代の自治体行政が目指していたビジョンである。なぜこれがダメなのかについてはセッション全体を通じて議論がなされ、そして人を幸せにする都市のあり方を考える上では、都市計画（という学問・技術）の枠の中だけで考えてはダメであるという明確なスタンスが2人から示される。そして人を幸せにする都市の根源にあるのが、人の尊厳の問題であることも共通認識だったと言えよう。但し、蓑原氏はこの尊厳の問題は、日本においては戦後に導入された概念であることを指摘する。

とても難しい問題だが、少し視点を変えて考えてみよう。2020年、コロナ期に入ってから韓国ドラマを集中的に見るようになったのだが、多くの韓国ドラマが扱う根本テーマまさにこれ、すなわち「人が幸せに生きられる社会とは何か？」である。韓国ドラマがK-POP同様に世界に通用したのは、現実の社会問題・構造を背景にした上で、個別の人物の様子をリアルに描くことに成功したからだと考えている。要するに俯瞰的視点と、具体的な観察、その先は脚本、監督、役者、映像、音楽（OST）、編集と技術的な問題となっていくのだが、人の心に食い込むドラマになっているのは、「世界」をしつかり描いているからに他ならない。宮台氏の言葉を借りれば、「世界はデタラメである」にも関わらず、しかし自分は生きていかなければならない、そしてそのデタラメな世界の中で自分が生きる意味は何かを問い、その答えを見いだす。そして多くの場合、その答えは自分の最も身近な存在、家族、地域社会にある。そこに深い共感が生まれるという構造だ。しかしながら、家族、地域の繋がりの深かった韓国社会においても近年その崩壊が問題視されており、韓国民も失ったものに気がつくという構造を持っている。このような俯瞰性という意味では日本のドラマではちょっと太刀打ちできない。

『マイ・ディア・ミスター〜わたしのおじさん』（2018）はイ・ジウン（歌手IU）とイ・ソンギョンが主演のドラマだが、貧乏な家庭に育った若い女性イ・ジアンと建築会社に勤めるが不幸な人生を送っているサラリーマン、パク・ドンフンの心の交流を描いたドラマだ。このドラマで描かれる社会背景は、下層社会の経済、社会差別の厳しい現実と、上層社会にあってもミス1つで転落させられる救いのない厳しい現実である。不幸な2人が出会って様々な罫に翻弄され、ドンフンは不幸なジアンを助け、当初ドンフンを陥れるミッションを受けたジアンはドンフンとの心のやりとりを通じて最終的にドンフンを助ける。そして彼らを支えるのはドンフンの家族であり、地域社会であるという構造。しかしドンフンは自分の鏡のようなジアンに会うことで自分が生きる意味を見つけていく。

しかし視聴者はこうも考える。もし、彼の家族がこうでなかったら、地域がこうでなかったら、間違いなく破滅しているだろう。そしてここで描かれる「フゲ」という街が、ソウルの近郊という設定なのだが、近代都市計画によって開発されていない、古く寂れた街であるというのも重要なポイントになっている。こんな地域が昔はあったなあ。

宮台氏は宮崎駿監督のアニメ『君たちはどう生きるか』の解釈について次のように発言した。

“思い出すのが僕の師匠小室直樹氏の言葉「社会がダメになると人が輝く」です。全体主義は悪い社会。だからそこを生きる人は皆不幸。民主主義は良い社会。だからそこを生きる人はみんな幸せ。「んなわけねえだろ、バカヤロー」と宮崎氏は怒っておられる。全体主義「だから」民主主義を希求する立派な人がいた。民主主義を希求することが人を立派にした。立派な人は、命懸けで価値を貫徹しようとした。”

韓国ドラマが注目しているのは、まさに宮台氏の言う「人が輝く瞬間」である。そして、その前提となる社会や地域はどんな状態であるかということを経長のドラマとして表現している。無理矢理言うともちづくり的ドラマであり、リアルな街とは何かを圧倒的な迫力で表現している。

先に紹介した宮口氏が自著『地域を活かす』(2007/原書房)の中で、農山村地域に関して「地域社会の社会論的豊かさ」という考え方を提示している。社会経済が発展し、「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」へとと言われるようになったが、一足飛びにここに行くのはどうかという主旨で、以下のように述べている。

“「こころの豊かさ」は、一人一人が自分なりに、文化という言葉で代表されるような楽しみなり感動を持てることだと思われるが、これはシステムの樹立としてできることではない。公的にはせいぜい劇場や図書館を整備し、活動に補助金を出すところまでであろう。それよりも、その個人個人が住んでいる地域社会を、社会システムとして持続的に豊かにしていくことこそが問われるべきだと、筆者は考えてきた。社会は約束事で成り立っているシステムである。そして日本の農山村の伝統的な地域社会は、地域によっては細かく強力な約束事を多く継承してきた。その約束事の意味が問われないまま、人々の暮らしが広域的な関係を基盤にするようになって、地域社会は一貫性を失ってきている。”

宮口氏は、農山村社会は昔から強力な「システム」を持っていたが、時代と価値感の変化によりそのシステムをバージョンアップしていかなければ、地域の生業と個人の尊厳を支える地域社会が持続しないことについて警鐘を鳴らしている。過疎、農村地域については以前仕事で携わり、漁村については東日本大震災からの復興計画の関係で様々な地域(港)とお付き合いしてきたが、ある種の「掟」の世界と、個人が「輝ける」可能性の残った地域であると思える。業というミッションを共有している前提があることも大きい。少ない人口、過酷な自然環境、広大な土地と海洋、生存リスクというハンデを共有していることがいざという時の絆を発揮できる基礎条件になっているからである。

さてここで、社会が何かのハンデを負っていないと人は輝けないのか、幸せになれないのかという問題が生じる。そうかもしれないとも思う。農山漁村はハンデと同時にある種の共通前提を共有している。しかしながら、多くの地域社会—例えば大都市郊外の住宅地など—では、その共通前提はない。今、まちづくりを考える上で非常に難しい問題はこういうところにある。

この問題に関し、宮台氏は個人の「感情的な能力」を上げることの重要性を指摘し、都市計画家の仕事としてこれを支える場づくりが重要であるとした。

“森関連や恋愛・宗教のワークショップの目的は、1 物理・身体的 physical な配置にアフォードされる身体的能力と、2 相手へのなりきり role taking という感情的能力を上げること。双方に関連するのが、言語的に未規定なものを斥けずにワクワクする能力。総じて物理側の要素と人間側の要素は相補的。片側だけ考えられません。

建築家や都市計画家は、(1) 場所のデザインに際して利用者の身体的・感情的能力のクオリフィケーション(資格審査)を要求し、(2) それを前提にそうした身体的・感情的能力を上昇させる育ち上げの場所をデザインすることを考えるべきです。”

つまり、個人の能力を引き上げていくことから地道にやっていくしかないわけだが、同時にその地域社会における共通前提をも構築しなければならないという気が遠くなる課題を抱えているという訳である。

個人の感情的能力の引き上げということについて、韓国ドラマからもう1つ例を出しておこう。『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』(2022/ ENA) は自閉症スペクトラム症候群の弁護士、ウ・ヨンウ (パク・ウンビン演) が独自の発想で事件を解決していくドラマだ。第9話に「笛吹き男」という話がある。韓国の厳しい受験社会を背景に描かれたドラマであるが、塾経営者の息子がある日、塾生達をバスに乗せて誘拐してしまう。彼は自らを「子供解放軍」と呼び、子供達を森に連れて行き、4時間ほど徹底的に遊ばせるのである。当然大問題に発展、彼は親たちに訴えられる。しかし彼には信念があった。子供達は受験勉強で貴重な子供時代の時間を奪われてはいけなないと。弁護したウ・ヨンウは減刑という意味での弁護は不可能と考えつつも、彼の思想に共感し、「彼の思想を弁護する」という珍妙なスタンスを取り始める。しかしこの信念故、彼は事件を反省せず有罪の判決を受ける。そして最終弁論で彼は次のように述べた。

“まず、子供を持つ大人の方々に申し上げます。子供達は今遊ぶべきです。後ではいけません。大学に入ってから、就職してから、結婚してからでは遅いのです。石倒し、かくれんぼ、馬跳び、ゴム遊び、後では遅すぎます。不安だらけの人生では、幸せに続く唯一の道はもう探せない。”

この話が妙に心に刺さるのは、単に韓国の受験社会の批判に終わっているのではなく、人間の幸せに繋がる体験(学び)の本質を突いているからだろう。

6. 最後に一共通前提を探すことはできるか

現在伊豆半島の小さな温泉場のまちづくりに取り組んでいる。全国にも苦戦している温泉場は多い。案の定この地域も同様で、その原因の1つは住民、観光関係者、お寺の関係者など立場の違う人同士の分断である。しかし、彼らの話を1人1人丁寧に聞いていくこと、共通の価値感もうっすらと見えてくる。長い歴史の中で形成されてきた地域であるという背景も影響し、時間を遡ることによって考える起点を探し当てることも不可能ではないだろう。そういう意味ではまだ幸せな地域であると言える。しかし、実際に動き出すまでにはそれなりの時間を要しよう。それでもやりがいはある。そして彼らと対話する中で今回のセッションの数多くの思想、キーワードが頭をよぎることだろう。

今回のセッションでは想像以上に多数の方々に聴講頂いた。会場に入りきれなかった方には急遽隣の部屋を確保し、オンラインでの試聴をして頂いた。会場は熱気に包まれていたが、運営の不幸で

宮台氏のマイクが時折接続不良で聞き取りにくかったこともあり、聴講された皆さまにはご迷惑をおかけした。しかし、そのこともあって、会場に居た多くの方が前のめりになって3人の言葉に聞き入っていた様子も印象的だった。

今回事後のアンケートをとりそびれてしまったので、皆さんがどのような感想を持ったかは不明である。正直、難しい話だなあと思った人も多かっただろう。しかし、それでもそれぞれの仕事に接続するヒント見つけ、このような学問による知見を現場でも活用しようと考えてくれた方も多かったのではないかと考えているし、そうであることを祈るばかりだ。

最後に、今回のセッションに登壇頂いた、蓑原敬氏、宮台真司氏、野口浩平氏には、多忙の中時間を割いて頂き、心より感謝申し上げます。